

fig.116  
調査区  
平面図・断面図

- |              |              |                |
|--------------|--------------|----------------|
| 1. 盛土        | 5. 灰黄色砂質シルト  | 9. 淡褐色種縫砂シルト   |
| 2. 旧耕土       | 6. 脱褐色砂質シルト  | 10. 白灰色シルト質種縫砂 |
| 3. 旧未土       | 7. 脱褐色黃色砂砾   | 11. 黄褐色砂質土     |
| 4. 乳灰白色砂質シルト | 8. 褐灰色種縫砂シルト | 12. 褐色砂質土      |

調査区の南隅で検出した柱穴は、直径が30~40cmの円形で、深さが20cm以上あるもので構成されており、東西方向に並ぶ2間以上の建物である。柱間は約1.5mで、南に建物が続くものと考えられる。柱穴からは古墳時代の須恵器片が出土している。

溝は、S D 201・202が南北方向に流れるもので幅50cm、深さ20cmの断面が緩やかなU字形の溝である。弥生時代の遺物が出土した。S D 203は、東南方向に流れる溝である。東側が調査地外にあるための幅と断面形状は不明である。調査地内での深さは40cmを測る。遺物は出土しなかったが、調査壁の土層観察と中世のピットとの切り合い関係から中世でも比較的新しいものと考えられる。

#### 49-3次調査

調査区の東側3分の1を大きな搅乱により失っている。

**第1遺構面** 小溝と足跡を検出した。小溝は幅10cm、深さ5cm前後で弧を描くように検出した。足跡は、24cm前後のものである。検出状態では歩行しているようではなく、横方向にずれたように検出した。出土遺物はないが、中世でも比較的新しいものと考えられる。

**第2遺構面** ピット2基と浅い落ち込みを検出した。S P 201は直径20cmの円形で、深さは15cmを測る。S P 202は直径30cmの円形で、深さは25cmを測る。

S X 201は浅い落ち込みで深さは、検出面から7cm、直径2.4mの大きな円形で、薄いレンズ状の堆積である。中からは人頭大の石が散在して検出されており、鉄釘、青磁片、銭が出土した。銭は、全部で3枚出土しており、内1枚は不明であるが、北宋銭の祥符通宝と嘉祐通宝の文字が判読できる。

**第3遺構面** ピット12基と土坑1基を検出した。ピットは、20~30cmの円形のものと、4基について直徑50cm以上の大きな円形のものに大別される。大きなピットの深さは、20~30cmを測

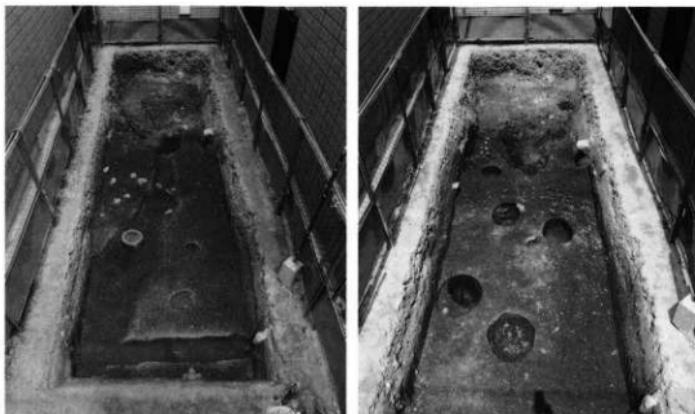


fig.117 (左)

第1遺構面全景

fig.118 (右)

第2遺構面全景

る。小さなピットは、深さが10~20cmを測る。土坑は、東の搅乱により大半を失っているために形状などは不明であるが、古墳時代の遺物が出土している。

### 3.まとめ

いずれの調査区も30m程度の狭小な範囲での発掘調査となつたため、各遺構面の建物構成や土地利用の判別は行えないが、概ね中世と古墳時代の遺構が広がっていることが確認できた。周辺の調査と今後の調査結果を合わせた上で当地域の土地利用などを分析する資料が得られた。

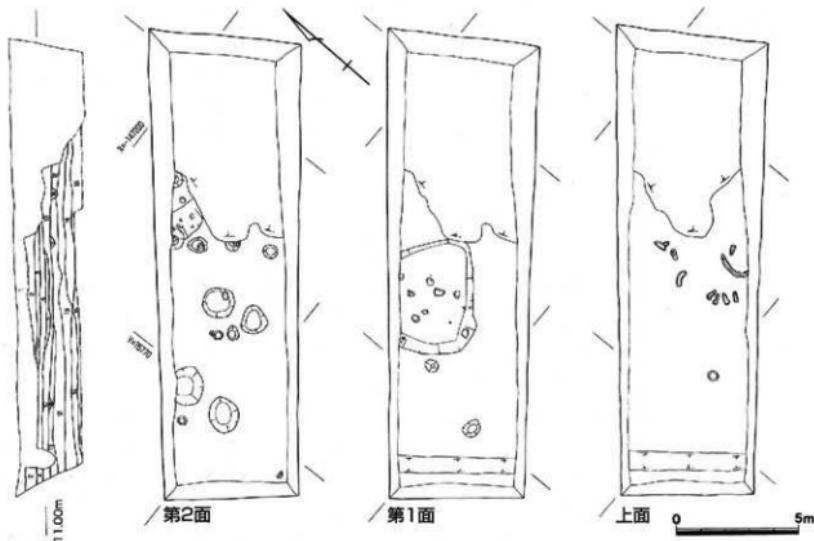


fig.119 調査区平面図・断面図

## 15. 上沢遺跡 第50次調査

## 1 はじめに

上沢遺跡は、六甲山系南麓の兵庫区北部、会下山という小丘陵の裾部に形成された、北東から南西方面に緩やかに下がる扇状地に立地する。これまでの50次に及ぶ調査で、縄文時代前期から中世にかけての集落が断続的に形成されていたことが判明している。

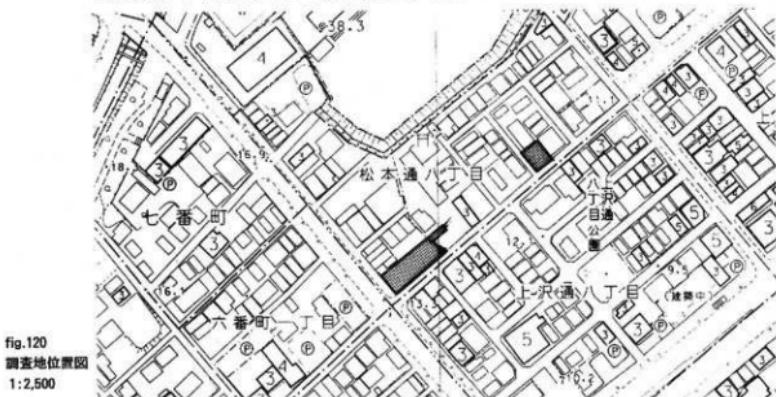


fig.120  
調査地位置図  
1:2,500

## 2 調査の概要

今回の調査は、松本線道路改築事業に伴うもので、道路の拡幅される部分の調査を行った。周辺では弥生時代から中世の遺物・遺構が確認されている。調査地は、2ヶ所（1・2区）に分かれる。

## 1区の調査

基本層序は、盛土・擾乱土（瓦礫・砂質土）・灰褐色砂質土・暗灰褐色粘性砂質土・灰褐色中砂～細砂（第1構造面）・灰褐色砂質土（東半部の第1構造面）・暗褐色粘性砂質土（第2構造面）・暗褐色粘性土（第3構造面）・暗褐色混疊細砂・淡褐色混疊細砂～中砂である。各構造面の高さは標高11.9～12.1m前後を測る。

第1讲 搞而

土坑1基、ピット10基が検出された。上坑は幅0.6m、検出長約1.5mの長椭円形で、後世の攪乱坑で西側と北側が削られている。埋土内からは古墳時代初頭頃の土器が、礫と共に多く出土した。ピットからは、鎌倉時代前半頃の遺物が出土するものがある。

第2講標面

北半部で流路1条、南半部で溝1条および小規模なビットが数基確認された。流路は検出長が約6m、幅約0.8mで、西から東に流れ、弥生時代の土器と礫が堆積している。この流路は、洪水等により形成された可能性が高い。溝は検出長が約6m、幅約0.3mで、北西から南東に流れ。土器片と礫が若干出土したのみである。

第3课概要

北半部に湿地状の地形が検出され、その部分には土器が大量に投棄されていた。土器群の詳細はまだ検討していないが、およそ庄内併行期に属するものと現在のところ判断している。また、南半部で小規模なビットが数基確認された。

断割り認

第3造構面の調査完了後、下層の断割り調査を実施したが、細砂～粗砂層と黒褐色シルトが堆積しており、造構は確認されなかった。



fig.121  
1区  
第3邊縁面全景

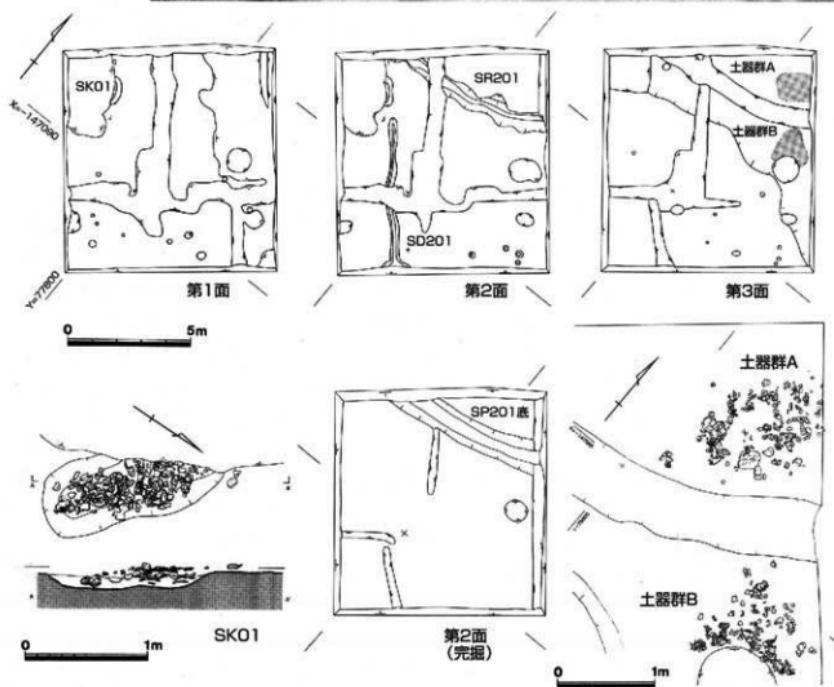


fig.122 1区 平面図

- 2区の調査** 調査区を東半と西半に区分して調査を実施した。東半部では遺構が確認されず、西から東に下がる谷地状の地形が確認された。西半部では、真中が高く、西側に下がる地形を呈する。2区付近が、扇状地地形の一一番高いところにあたり、このあたりから、東西方向に徐々に下がっていく。真中付近の遺構面の高さは標高13.1m前後を測る。
- 基本層序は、盛土・攪乱土（瓦礫・砂質土）・黄灰色～灰色系砂質土（中・近世耕作土）・灰褐色粘性砂質土（遺物包含層）・淡灰褐色砂質シルト（西側落ち込み部分堆積物）・暗褐色砂質シルト（〃）・灰色～褐色系中砂～砂礫（近世頃の洪水堆積物）・灰色～黒色シルト～中砂（谷地状地形堆積物）・黄灰褐色中砂～細砂（遺構検出面）である。
- 東半部** 東半部では、遺構が確認されず、西から東に下がる谷地状の地形が確認された。この地形にはシルト・細砂～粗砂が互層になって厚く堆積しており、最終的には調査区の東端で確認された、近代頃の流路となって埋没している。
- 拡張部** 前年度、一部未調査であった部分にトレーニングを設定して調査を行った。その結果、谷状の地形から微高地に上がって行くことが判明し、東端ではピットが1基、確認された。
- 西半部** 西半部は、真中あたりが高く、北東と南西にそれぞれ下がってゆく地形である。遺構は真中付近で検出された。遺構からは弥生時代後期から平安時代の遺物が出土した。
- S D01** 西側は直線で東側は弧状を呈する溝で、幅0.3～0.8m、長さ10.5m分を検出した。深さは0.1～0.2m前後で、断面は浅いU字形を呈する。礫や土器、鉄型？がまとまって出土する部分がある。
- S D02・03** S D01から派生する溝で、S D03はSK01に取り付く。また、小礫が集中して出土した。
- SK01** 一辺5mの方形を呈する可能性のある土坑であるが、大半が調査地外にあるため、正確な形状は明らかでない。また、S D03との接点部分で礫多く出土した。竪穴住居の可能性はあるが、調査範囲内では周壁溝や柱穴は確認できなかった。埋土上層から、古墳時代後期の上器が出土している。
- ピット** 溝の周辺には、ピットが散在した状態で発見された。溝を取り囲むように確認されたピットもある。ピットからは、鉄型？の破片が出土するものや10世紀頃の土器が出土するものがある。
- 流路** 2区の西端では、ほぼ南北方向に延びる流路が検出された。砂礫～粗砂層が堆積する。中世耕作上層を削って流れ、その上には、近世から近代頃の耕作上層が堆積していることから、近世頃の洪水による堆積層と推定される。
- 落ち込み** また西端では、落ち込み状の地形が検出された。遺物包含層と同様の灰褐色粘性砂質土が堆積しており、この堆積土中には10世紀頃の遺物が多く含まれていた。
- 3.まとめ** 1区では、3時期の遺構検出面が確認された。第1面は、中世のピットおよび、古墳時代初頭の土坑が検出され、第2面では、弥生時代後期頃の流路、溝、ピットが確認された。第3面では、湿地状地形と弥生時代後期の土器群、ピットが発見された。
- 2区では、弥生時代後期から平安時代の遺構・遺物が検出された。また、中世頃に埋没した谷地状の地形や近世頃に形成された洪水砂層等からみて、この付近は現在よりもかなり地形の起伏が激しい場所であったことが想定される。



fig.123 2区 SD01・02



fig.124 2区 跑衣壺

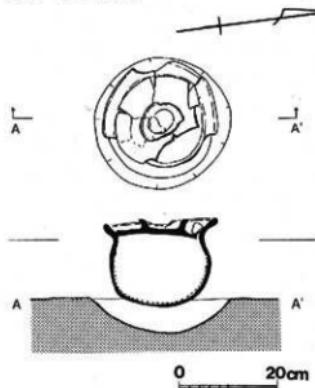


fig.125 跑衣壺出土状況平面図・断面図

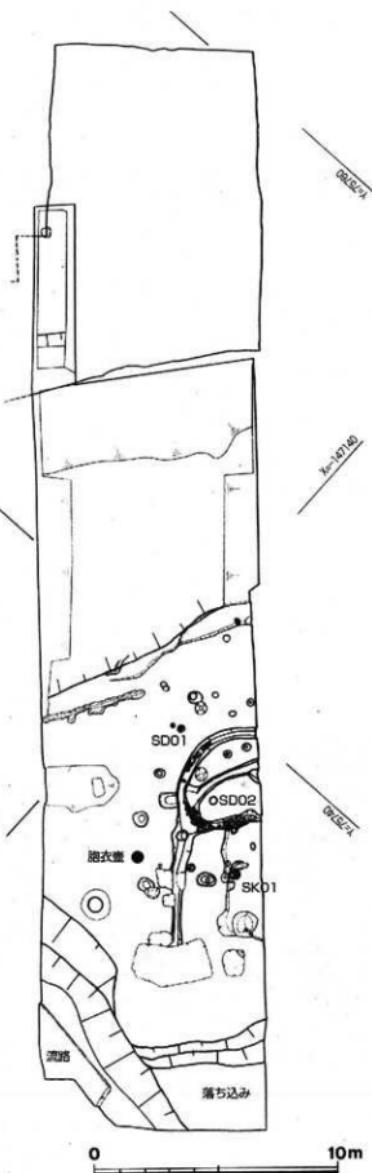


fig.126 2区 平面図

## 1. はじめに

上沢遺跡は、六甲山系から南に延びる会下山丘陵の南に広がる縄文時代から室町時代にかけての集落遺跡である。遺構の密度は高く、今までの調査で同期の井戸・溝・土坑・掘立柱建物址などが検出されている。遺物に関しては注目すべきものが多く弥生時代初期の土器類、内行花文鏡と推定される破片、酒津式土器、韓式上器、重圓文軒平瓦、綠釉陶器、灰釉陶器、墨書き土器、土馬、銅鏡、錢貨や帶金具などが検出されている。

fig.127  
調査位置図  
1:2,500



## 2. 調査の概要

今回の調査地は、東西に走る松本通の南に面する地点で、南へ下がる傾斜地に立地している。このため後世に水田の造成などにより段状に変改されていた。遺物包含層および遺構面の残存状態もこれに影響され、北側の約4分の1（I区）と南のII～IV区の間には約50cmの段差が生じていた。

I区では3枚の遺物包含層と4面の遺構面、II～IV区では2枚の遺物包含層と2面の遺構面が検出された。遺物は28リットルコンテナで21箱出土し、平安時代と弥生時代後期から古墳時代初頭および弥生時代前期中頃の3時期に大別される。検出した遺構もこの3時期のいずれかに属するものと考えられる。以下、個々の遺構の所属時期に関しては遺物整理が行われていないため断定はさけるが、調査期間中の所見を基に時期ごとの遺構の概要を記したい。

**第1遺構面** 第1面は平安時代の遺構で、柱穴群と浅い溝を検出した。遺物は9世紀後半から11世紀頃まであり、I区の遺物包含層から銅製品が1点出土した。銅製品は錢貨とも考えられるが現在土に覆われているため明確ではない。II・III区北半部分は地形が段状にカットされた時点で遺構が削平されたものと思われ、検出されなかった。

I・IV区からは多くの柱穴を検出したが、調査地内で建物としてまとまるものは明確ではない。I区のPit 115では柱を抜き取ったあとで黒色土器A類の碗が埋置された状態

で検出された。IV区の柱穴群は後述する弥生時代後期の遺構と同一面で検出したものであるが、遺構内からの出土遺物が極めて少なく弥生時代のものが混在する可能性があるが、一応平安期のものとして図示し遺物整理が終了した段階で最終的に帰属時期を明らかにしたい。

**第2遺構面** 第2面は弥生時代後期から古墳時代初期に属し竪穴住居址、柱穴、溝のほか土器窯などが検出された。

**S B01** III区で検出したもので辺4.1mの方形を呈し中央に炉、南には柱穴が1基あり、炉からこの柱穴に向かって浅い小溝が延びる。炉は浅く深さ10cmで内部には炭・灰が堆積していた。柱穴の付近から人頭大の黄色粘土塊が2個出土した。土器製作用の粘土を屋内に貯蔵していたものと推測される。同様の例は北区山田・中遺跡の同期の竪穴住居でも検出されている。S B01の床面からは少量ではあるが炭化材が残存しており焼失住居と考えられる。

**S X01** S B01の北側で検出した遺構で東側は調査区外、南側は後世の削平で全体を知りえないが、北辺に浅い溝があり、これを周壁溝とすれば方形竪穴住居址の一部と考えられる。底面の一部に炭化材がありS B01同様焼失住居と思われる。出土遺物が細片で量的に乏しく、かつS B01との切り合い関係も明瞭ではないが、S B01と相前後する時期と思われる。

**S D01** S B01の南で検出された南北方向の溝で長さ5m以上、幅は1.5mほどと見られるが東辺ラインが明瞭ではない。溝南半の西側で甕を中心とした土器が一列に南北方向に並んだ状態で検出された。口縁部を南に向けたものが多く投棄というより掘え置かれた感が強い。高环形土器

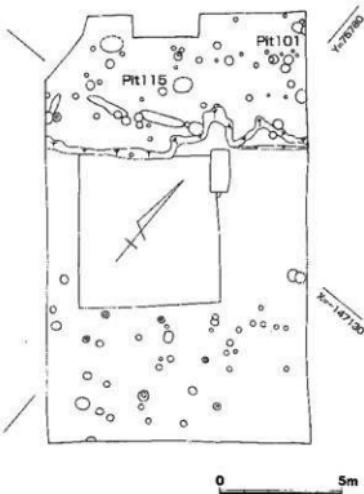


fig.128 第1遺構面平面図

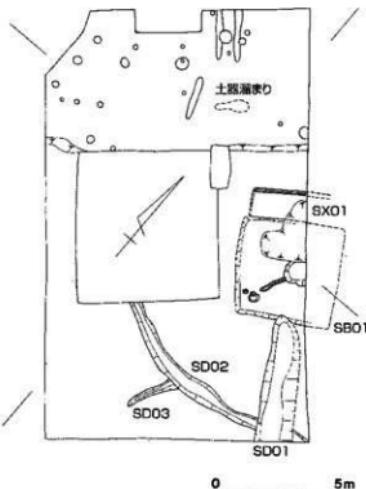


fig.129 第2遺構面平面図

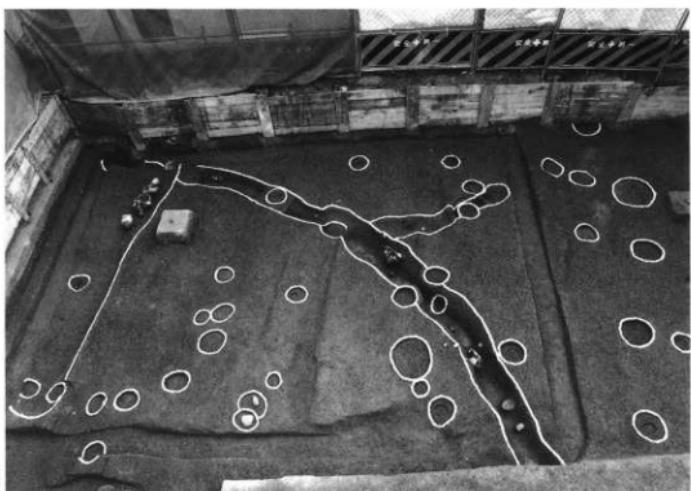


fig.130  
IV区  
第1・2造構面全景



fig.131  
S B01・S X01

がなく決め手を欠くが、庄内期のものと考えられる。

**S D02** S D01に切られる東西方向の溝で埋土から数個体の土器が出土した。弥生時代後期後半のものと思われる。

**土器溜り** I区で第1造構面のベース土を除去する段階で確認した。高環・甌・鉢などの破片が集中していた。個体数は少なく4ないし5個体と思われる。布留式の最古段階の時期と考えられる。

**第3造構面** 第3造構面はI区でのみ検出されたもので、第2造構のベース土を約10cm下げた段階で確認した。ベースとなる土の質はやや軟弱で、あるいは第2造構面で明確に検出できなかっただ造構が、この段階で把握できたものであるかもしれないが第2造構面の造構内埋土と異なるものも存在することから1つの面と考えておく。造構としてはピットや浅い土坑のみで遺物もごく少量だった。ピットの並びも不規則で建物としてまとまるものもない。

**第4造構面** 当調査地区での最終面で弥生時代前期に属する。壺の体部片に削り出し凸帯が見られ前期中ごろと思われる。溝・土坑・ピットなどが検出された。

**SK201** IV区で検出された直径約70cmの浅い土坑で甕が2~3個体出土したが、完形になるようなものはない。

第4造構面の下約15cmに暗灰色の土層が堆積するため、調査区東壁に沿ってトレンチを入れ観察したが遺物の包含も見られず、造構も確認されなかったため、第4面を最終造構面と考え調査を終了した。

**3.まとめ** 今回の調査では、弥生時代前期から平安時代にいたる計4面の生活面が確認された。上沢遺跡に於ける都市計画等に伴う発掘調査も最終段階を迎えており、今までに集積された多くのデータと比較・検討することで当該地区の造構の性格などが明確となるものと考えられる。

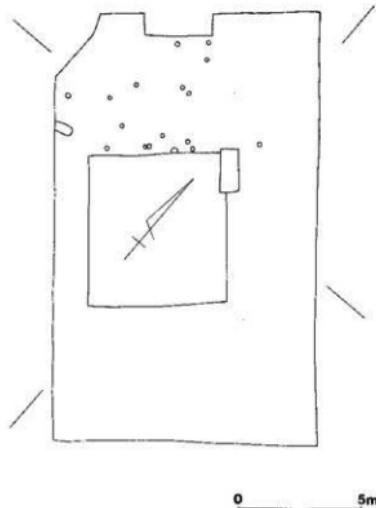


fig.132 第3造構面平面図

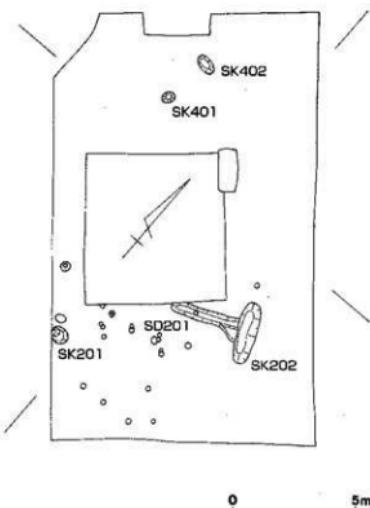
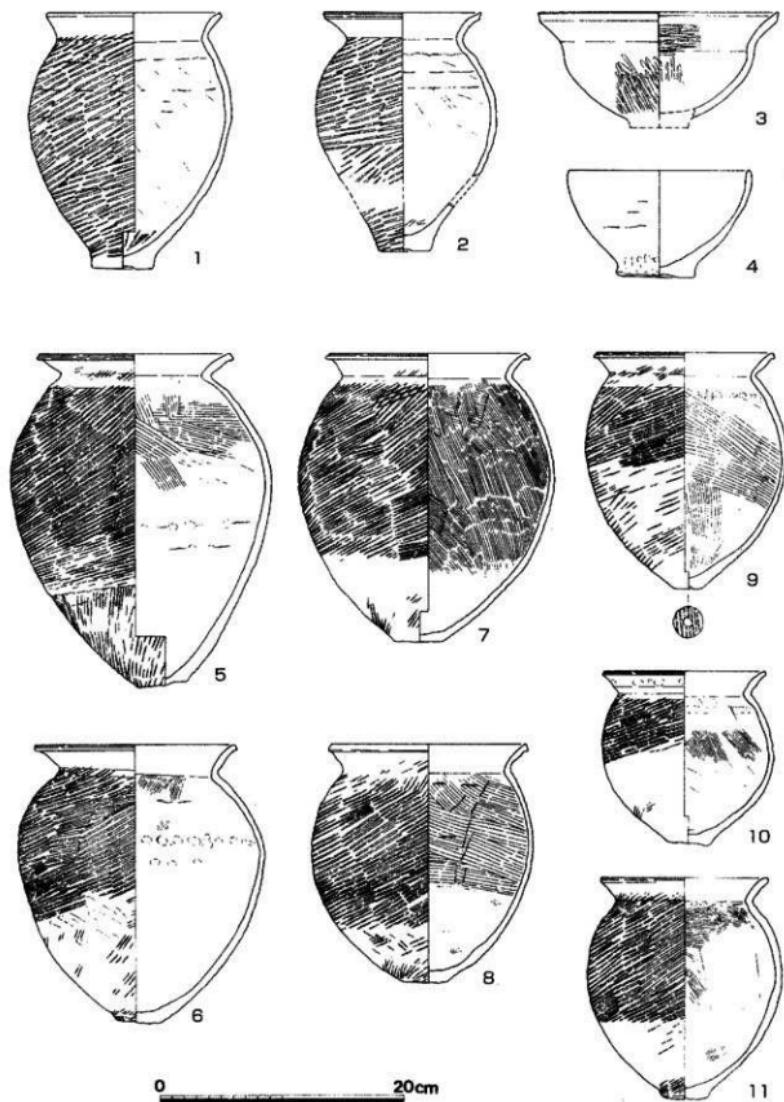
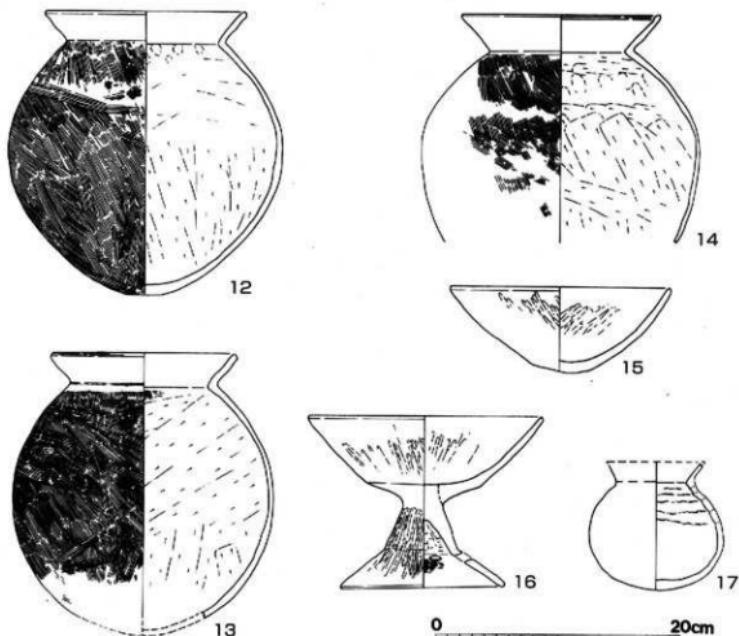


fig.133 第4造構面平面図



(1~4:SD02,5~11:SD01)

fig.134 出土遺物実測図(1)



(12~17:第2遺構面土器割れ)

fig.135 出土遺物実測図（2）



fig.136 第2遺構面土器割れ

## 17. 御藏遺跡 第50次調査

### 1. はじめに

御藏遺跡は六甲山南麓にひろがる神戸市街地の西部に所在する。この一帯は、六甲山系にそって東西に細長く平野が形成されるが、これらの地形は六甲山から流れ出た幾本かの小河川の堆積作用によって形成されている。御藏遺跡はこれらの小河川のうち薺藻川の左岸の自然堤防上および後背湿地にまたがって立地している。現状地形では遺跡周辺は標高6m前後を測る低地で、北東方向から南西方向の緩やかな傾斜面に形成されている。

御藏遺跡は平成2年度に発見された遺跡である。その後市営住宅建設に伴う第2次調査で、奈良時代の掘立柱建物や井戸が発見され、御藏遺跡の歴史的性格が明確になった。

以後、震災復興土地区画整理事業などに伴う調査で奈良時代の真南北に並ぶ掘立柱建物、土留め杭を敷設した東西・南北の溝、井戸などの検出とともに、帶金具や転用硯など官衙的色彩の濃厚な遺物も出土し、八部郡衙推定地のひとつと考えられるようになった。

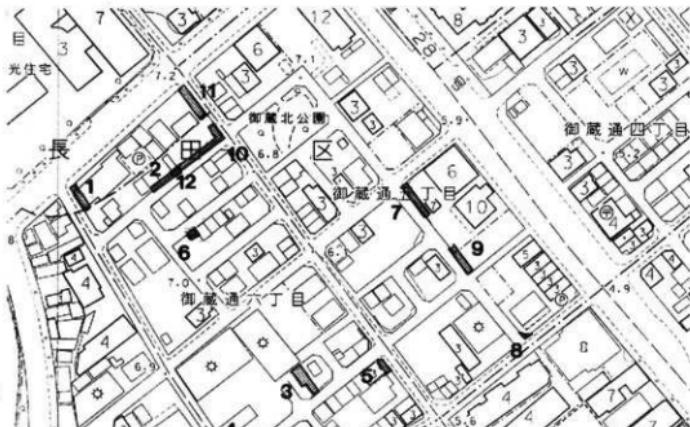


fig.137  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 1区

区画整理事業区域の北西端に位置する。調査区北側で現況道路下約80cmにおいて中世の遺物を含む包含層を検出した。北側では遺物包含層直下に青灰色粘質土上及び黄褐色粘質土の地山となり、構造は検出されなかった。北側では若干の遺物包含層を検出したが、南側では遺物包含層は削平され、近代以降の水田造成土が堆積し、現況道路下約1.0mで、ほぼ真南北方向の溝を検出した。溝は地山面から掘り込まれて、幅60cm、深さ80cmを測る。断面形は箱掘りで、底幅40cmで平坦に仕上げている。溝の底には半裁した丸太を敷き、さらにその上に長さ1.8m、幅30cm、厚さ6cm前後の板材を敷いて、常滑製の土管を敷設している。土管は長さ90cm、直径21cmで4本分検出した。土管の敷設方向から考えて、北から南へ導水した施設と考えられる。

出土遺物は、調査区北部の包含層内から、中世の須恵器・土師器の細片が出土している他溝上層部で土師器・須恵器・白磁片が出土している。

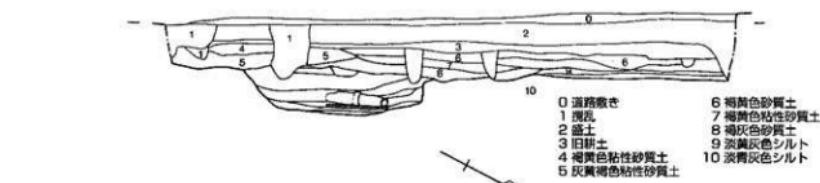


fig.138  
1区  
平面図・断面図

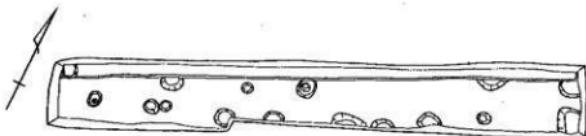
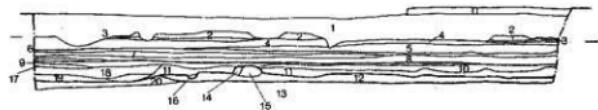


fig.139  
2区  
平面図・断面図



- |            |                 |                   |
|------------|-----------------|-------------------|
| 0 コンクリート敷き | 6 黄灰色粘質土 (砂混じり) | 11 淡青灰色粘性砂質土      |
| 1 混乱       | 7 淡青色粘性砂質土      | 12 黄褐色粘質土         |
| 2 旧耕土      | 8 灰色粘性砂質土       | 13 黄褐色シルト         |
| 3 旧床土      | (原床時代遺物包含層)     | 14 淡青色粘土+灰色砂      |
| 4 淡黄灰色砂質土  | 9 淡青褐色粘性砂質土     | 15 淡褐色粘性砂質土       |
| 5 淡褐色粘性砂質土 | 10 淡褐色粘性砂質土     | 16 淡黄色粘質土 (漂泥じり)  |
|            |                 | 17 淡褐色粘質土         |
|            |                 | 18 淡青褐色粘性砂質土      |
|            |                 | 19 淡青褐色粘質土 (漂泥じり) |
|            |                 | 20 淡灰色細砂          |



fig.140 3区 平面図・断面図

## 2区

現況道路面下80cmで奈良時代後半の遺物包含層を検出した。その直下に暗黄褐色粘質土と暗褐色粘性砂質土を混じえた土層が水平に堆積し、その上面から直径20~30cmの柱穴と考えられるビットを検出した。ビットの深さは20~30cm前後、底面の形は方形で抜き取りが行われて、上部は不定円形となったと考えられる。一部のビットで柱痕跡を検出したが、建物等の特定はできなかった。この面を除去すると、暗黄褐色粘質土となり、調査区中央部で東西方向の隆起部を検出した。隆起部は暗黄褐色粘質土上に褐色粘質土と灰色砂を混じえた盛土で造られ、幅45cm、高さ20cm前後で断面形錐形をしている。水田の畦畔と考えられる。

出土遺物は遺物包含層から奈良時代の須恵器・土師器、弥生土器片が比較的多量に出土したが、柱穴内・水田内からは遺物の出土はなかった。

## 3区

区画整理事業区域内の中央部にあたる。現地表下60~80cmの旧耕作土直下で淡灰黄色シルト及び灰色粘性砂質土の中世遺物包含層を検出し、上面を精査した結果、調査区中央北より幅40cm、深さ16cm前後のL形に掘られた溝を検出した。溝の埋土内からは、土師器の細片が出土している。

さらに遺物包含層を除去した結果、暗黄褐色粘質土を基盤面とする遺構面を検出した。この暗黄褐色粘質土面は南に緩やかに傾斜し、調査区の中央南より幅5.0m、深さ24cm前後の東西に流れる河道状の落ち込みを検出した。この河道の北側では掘立柱建物1棟を検出した。

**掘立柱建物** 調査区北部で検出した東西3間以上、南北3間の掘立柱建物である。建物の規模は南北4.8m、東西4.7mを測る。柱間は東西1.6m等間、南北1.6m等間である。柱掘形は円形で、直径40cm、深さ20cm前後を測る。出土遺物は、柱掘形内から須恵器・土師器片が出土している。掘立柱建物を検出した基盤面の暗黄灰色粘質土内からは、須恵器・土師器細片が出土したため、下層の暗黄褐色粘質土と弥生土器を含む暗灰色砂質土を除去して、地山である黃褐色粘性砂質土上面を精査した結果、遺構は検出されなかった。



fig.141  
3区 調査区全景

- 4区** 区画整理事業地内の南西端にある。調査区の中央には旧工場の水槽が残り、遺構面が破壊されていたため、調査区を水槽より東側を東区、西側を西区として調査実施した。
- 東区** 東区では現況道路面下90cmで奈良時代の遺物包含層を検出した。その下層は古墳時代の遺物を含む明灰色粘質土で、上面でピット9基と土坑1基を検出した。(第1遺構面)
- この古墳時代の遺物を含む整地層を除去すると道路面下1.5mで淡黄灰色砂質土(地山)となり、東西の溝1条を検出した。(第2遺構面)
- 第1遺構面** 土坑は径90cmの円形で、断面は逆台形状を呈する。深さは70cmを測る。埋土中層からは馬の歯牙が出土している。
- ピットは9基検出したが、いずれも直径20~30cm前後の円形掘形で、深さ40cm前後を残し、柱痕跡も明瞭であるが、建物等には纏まらなかった。
- 第2遺構面** 調査区の東側で東西溝1条を検出した。溝の幅は24~40cm、断面形U字状の素掘りの溝で深さ14cm前後を測る。埋土内からは土器師細片が出土している。溝の西部には直径10cm、深さ5cmの円形ピットを検出したが、遺構の性格等は不明である。
- 現地表下82cmで奈良時代の遺物包含層を検出し、これを除去した結果、淡灰色粘質土上面でピット6基を検出した。
- ピットはいずれも円形の掘形で直径20~50cm前後を測る。ほとんどのピットは深さ20cm前後であるが、西壁際のピットは深さ40cmを測る。ピット内からの出土遺物はなく、建物としては纏まらない。

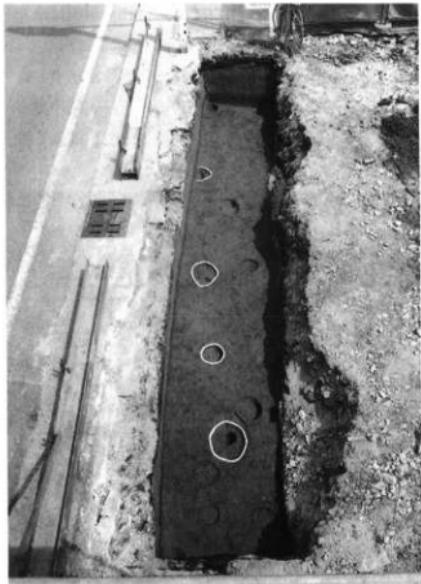
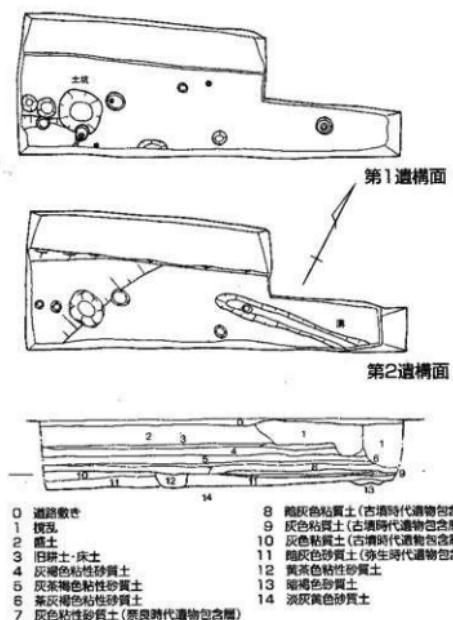


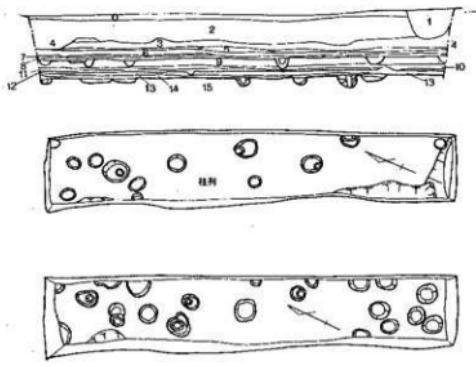
fig.142 5区 調査区全景



fig.143 7区 調査区全景



4区



5区

fig.144 4・5・7区 平面図・断面図

0 5m

- 5区** 現況道路面下約90cmで遺物包含層である暗茶褐色砂質土を検出した。その下層に第1遺構面となる灰黄色粘性砂質土を検出した。第1遺構面では柵列1条を検出した。この第1遺構面の灰黄色粘性砂質土内からは赤焼き土器の細片が出土したため、さらに掘り下げた結果、現況道路面下1.4mで弥生土器を含む暗灰褐色粘性砂質土を検出した。この遺物包含層は、調査区南部では消失し、北側ではやや厚く5cm前後で堆積している。この弥生時代の遺物包含層を除去すると第2遺構面の黄褐色粘性土となり、ピット18基を検出した。
- 検出遺構** 調査区北よりで検出した3間分の柵列である。柱間間隔は北から1.2m、1.4m、2.2mを測る。柱掘形は円形で直径40cm前後、深さ15cm前後を測る。柱掘形内の埋土からの出土遺物はない。
- ピット** 7基の径20cm前後の円形ピットを検出した。建物等には纏まらない。掘形内埋土からの出土遺物はない。
- 第2遺構面** 19基の円形掘形のピットを検出した。一部のピットで柱痕跡を確認したが、調査区が狭小であるため、建物等にはまとまらなかった。ピットの大きさは径40cm前後で、深さ25cm前後を測る。掘形内埋土からは弥生土器片が出土している。
- 6区** 今回調査実施した2区の南側の道路拡幅部の調査である。調査区は現況道路側の大半が埋設管によって搅乱され、南側壁部分についてのみ土層の堆積状況を観察することができた。堆積状況は、調査区西側で現況道路面から40cm下で青灰色もしくは黄灰色の粘土層が検出され、この地山である粘質土層は東に向かって傾斜して、黒灰色沙および粘土層が分厚く堆積している状況が現況道路から1.0m堆積しているのが観察できた。
- 今回の調査地が、沼沢地もしくは自然河道の西縁辺に相当すると考えられる。
- 7区** 調査区は工場建物であったため両端部を除いて工場建物の基礎、地中梁等によって相当の搅乱を被っていた。確認できる遺物包含層の深度は現地表から50cmを測る。搅乱坑の断面で観察できる基本層序は、現代の盛土・搅乱下に一部で厚さ10cmの奈良時代の遺物包含層である褐色粘性砂質土、その直下に奈良時代整地層と考えられる灰茶褐色砂質土、弥生土器を含む褐灰色粘性砂質土が堆積し、これより下層は明灰色シルトもしくは暗黃灰色粘質土の地山となる。以上から今回の調査区においては、奈良時代以降の遺構面、奈良時代の遺構面、そして奈良時代整地層内に弥生土器が含まれることから、地山面で弥生時代の遺構面が存在すると想定される。
- 第1遺構面** 検出された遺構は、調査区北部で溝1条、柱根を残す方形の柱掘形1基の他、調査区の中部から南部で11基の方形の柱穴を検出した。
- 溝** 調査区の北部をほぼ真南北方向に穿たれた溝である。上層整地層である灰茶褐色土から掘り込まれ、方形の柱掘形を切っている。溝の幅は上端で70cm、底部で25~30cmの逆台形の断面に掘られ、深さは北部で50cm、南部で60cmを測り、北から南に流れている。溝内の埋没土は、まず底部に灰黄色細砂が埋まり、西側からの崩壊土の堆積があった後、レンズ状に黒灰色粘性砂質土が堆積している。このうち灰黄色細砂の上面で須恵器の広口壺口縁部片が出土している。
- 柱穴** 検出した柱穴はすべて方形掘形で、褐灰色粘性砂質土上面から掘り込まれている。そのうち調査区北部で検出した柱穴は、一辺90cm、深さ75cmの方形掘形に径20cm前後、残存長

30cmの柱材を残していた。柱材は面取りされていた。掘形内埋土の状況から、柱を抜き取った際に、中折れして柱の下部を残したものと考えられる。

他の柱穴は、一辺60cm前後の方形掘形に、掘形の壁に沿うように柱痕跡を残している。埋土内からは、奈良時代の須恵器・土師器細片が出土している。

**第2遺構面** 調査区南端東壁沿いの奈良時代整地層内から弥生時代後期の甕1個体分が出土したことから整地層を地山面まで掘り下げ調査を実施したが、遺構等は検出されなかった。

**8区** 調査区は既存建物の基礎・埋設管掘形等によって壊滅していたが、幸うじて調査区南壁部と削り残された地山面で柱掘形1基を検出した。

検出した柱掘形は、現況道路面下40cmの地山面から掘り込まれ、上層部は厚さ20cm前後の暗灰褐色粘性砂質土の遺物包含層が被覆している。

南壁土層断面及び撲乱掘形底で検出した柱穴は、一辺90cm以上、深さ70cmを測る。土層断面の観察から、柱の抜き取りが行われたと考えられ、直径30cm前後の柱痕跡が掘形底から50cm程度残存している。

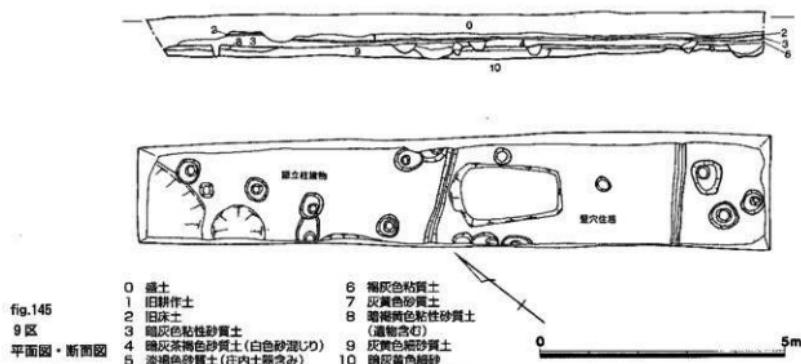
この柱掘形は平成11年度に調査実施された第14次-23調査区の奈良時代掘立柱建物SB208の東側隅柱と推定される。

出土遺物は、柱掘形内から土師器細片が出土している他、遺物包含層内から須恵器・土師器片が出土している。

**9区** 7区の南側、平成11年度に実施された第14次-9調査区に続く街路拡幅部の調査である。現況道路面下40cmで旧耕土となり、調査区南部で旧耕土下に暗灰褐色粘性砂質土の遺物包含層が堆積し、包含層下に弥生土器を含む淡褐色砂質土の第1遺構面となっているが、北側では旧耕土直下が暗灰褐色細砂の地山面が第1遺構面となる。

**第1遺構面** 第1遺構面で検出した遺構は、北側で掘立柱建物1棟、中央南よりで竪穴住居1棟、調査区南端で柱穴3基を検出した。調査区南部の弥生土器を含む土層下の第2遺構面では、上層の竪穴住居に切られるL形の溝を検出した。

**掘立柱建物** 南北4.8m以上、東西1.6m以上の掘立柱建物である。南北3間、東西1間分を検出した。この建物は、第14次-9調査区南端検出の柱穴に統くと考えられることから南北長は、4



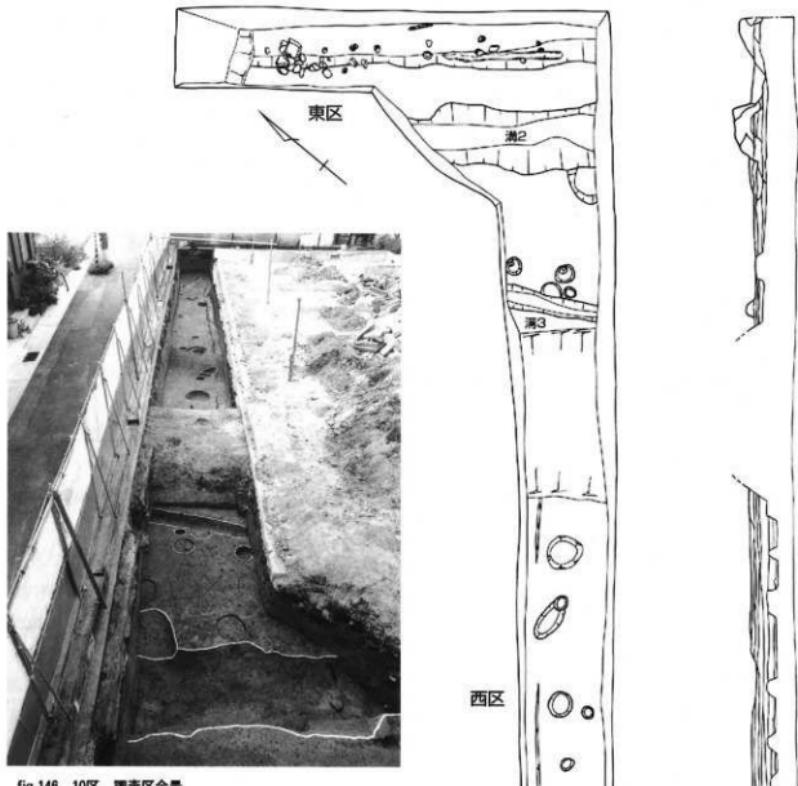


fig.146 10区 考査区全景

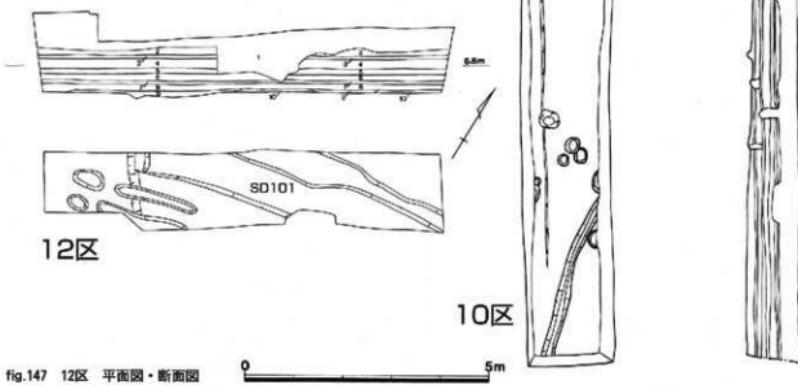


fig.147 12区 平面図・断面図

0 5m



fig.149  
9区 竪穴住居

間分6.4mと推定される。柱間は南北・東西とも1.6m等間隔で、東柱があったかどうか調査区が狭小なため不明である。柱掘形は直径50cm前後の円形で、深さ30cm前後残っている。柱掘形内の埋土からの出土遺物はない。

**竪穴住居** 南北5.0m、東西2.0m以上の方形竪穴住居である。竪穴住居の南・北辺を検出し西側及び東側は調査区外となる。竪穴住居の壁体は25cm前後残り、幅20cm、深さ10cm前後の周壁溝が壁体下端に設けられている。床面は暗灰黄色粘性砂質土を4~12cm前後貼り付けてつくっている。竪穴住居の南西よりの床上で杯蓋2点、杯身1点が置かれたと考えられる状態で出土した。明確な支柱穴等は検出されなかった。

**第2造構面溝** 第1造構面検出の竪穴住居床下から東西に掘られ、調査区南東隅で直角に西に屈折する素掘りの溝である。幅20cm、深さ10~20cmを計測する。溝底に直径10cm、深さ5cm前後の後的小ピットを検出し、掘形に深い部分と浅い部分があることから、方形竪穴住居の周壁溝の残痕とも考えられる。被覆土より弥生時代終わり頃の土器片が出土している。

**10区 西区 溝** 2区の東に継続する街路拡幅部の調査である。調査区の基本層序は現況道路面下40~60cmまで盛土され、調査区南辺中央には工場の基礎による搅乱坑によって遺跡は壊滅していた。

**西区 ピット** 調査はこの搅乱坑の西側を西区、東側街路隅角部を東区として調査を実施した。西区は現況道路下に約40cmの盛土、80cm下での遺物包含層である褐灰色粘性砂質土とその下の暗茶褐色粘性土を検出した。造構は遺物包含層の直下の青灰色シルト上面で検出した。検出した造構は、ピット13基、溝1条である。

**東区 溝** 幅30cm、深さ5~10cm前後の素掘りの東西溝である。断面形はU字形をしている。埋土内からは、土師器細片が出土した。

**東区 ピット** 埋土が暗茶褐色土のピットは径20cm前後、深さ6cm前後で西部に集中する。灰色粘性土を埋土とするものは不定形で、東部で検出した。

**東区** 東区は現況道路面下約60cmの盛土で、旧水田造成土直下の80cmで地山面を検出し、地山面より掘り込まれた溝1条、ピット4基を検出したほか、堅致な淡黄灰色粘性砂質土から掘り込まれた溝2条を検出した。

- 溝1・2** 淡黄褐色粘性砂質土から掘り込まれた溝1と溝2は、現在の街路方向とほぼ並行する。溝1は調査区東壁沿いで検出し、溝の東肩は調査区外となる。溝幅は1.2m以上、深さ70cmを測る。断面形は椀状をしている。溝の西側の肩部には上留めに用いた杭が1.2m間隔で6本検出できた。そのうち南側の2本の杭の内側には幅10cm、厚さ3cm前後の土留め板が残存していた。なお一部の杭では近接して内側に追加した杭が検出されている。
- 溝3** 溝1・溝2の埋土は、黄茶褐色粗砂・明灰色極細シルト・褐色砂等が互層に堆積しており堆積土内からは、瓦・陶器・磁器・須恵器など中近世～近代までの遺物が出土している。
- 11区** 東区の西端で検出した素掘りのU字溝で幅40cm、深さ20cmを測る。溝の埋土は暗褐色粘質土で、埋土内から須恵器壺片が出土した。なお溝3はピットを切っている。
- 12区** 第50～10次調査区の北側の交差点から南側の調査である。重機掘削の結果調査区全域が既存建物の基礎と地中梁によって破壊されており、状況の写真撮影後埋め戻しを実施して調査を終了した。
- 遺構** 今回の調査区は、第50～2次調査区の東側に隣接する場所にあたる。
- S D 101** 検出された遺構面は1面で、表土下約1mで遺構面が検出された。遺物包含層は存在せず、表土直下から遺構面直上まで7層程度に分層できるが、すべて耕作土である。耕作土からは9世紀以降の遺物の小片が少量出土した。
- 鉢溝** 調査区はほぼ平坦であるが、南西側が約5cm程度高く、鋤溝が数条検出された。北東側は溝状遺構が1条検出された。
- 3.まとめ** 今回の調査は、平成10年～平成12年実施の区画整理事業の街路整備にともなう調査に継続する調査で、ほとんどの調査が、道路拡幅部の狭小な部分的な調査であった。そのため、検出遺構の性格を明確にすることはできなかったが、調査区は事業区域全域において、遺跡の分布域について詳細な資料が得られたと考えられる。
- まず第一に、從来御苦西地区の北中央から南西に弥生時代から中世初頭まで広域の沼沢地の広がりが推定されていたが、第50～3次地区的調査において掘立柱建物が検出され、概ね中世の段階には一部の墳丘化した地域で宅地化が進行していたものと考えられる。
- 第二に事業区域東部では從来の調査と同様に奈良時代もしくは飛鳥時代の掘立柱建物に伴う柱穴や溝が濃密に検出された。また、第50～9次地区的調査において古墳時代後期～飛鳥時代の方形堅穴住居も部分的ではあるが検出された。この堅穴住居が周辺で検出されている飛鳥時代の掘立柱建物と共存していたか否かは掘立柱建物のなかで奈良時代の建物と飛鳥時代の建物とを分離するなどの作業をふくめて、今後の課題といえる。

## 1. はじめに

御藏遺跡の西方には、新湊川（荔藻川）がほぼ南北方向に流れ、その營力によって形成された微高地から後背湿地に、この遺跡は立地している。この付近の地形は北から南に緩やかに下がってゆく地形で、現況地表面の標高は6~7m前後である。

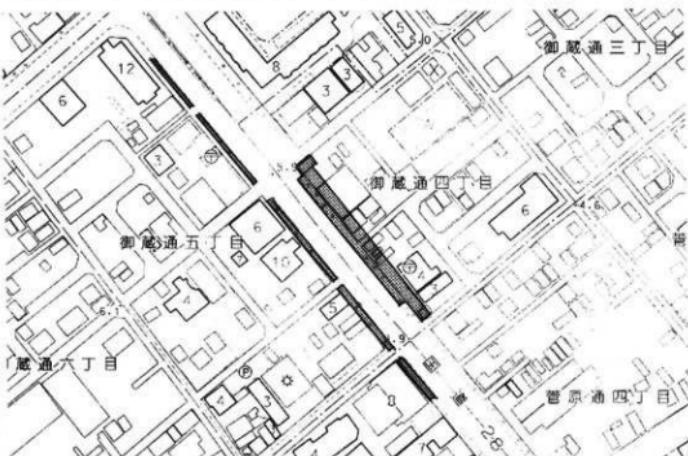


fig.150  
調査地位図図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査は、国道西側の歩道および一部車道部分に設置される電線・下水共同溝の設置に伴う調査（第51-1次調査）と国道28号線の東側の拡幅工事に伴う調査（第51-2次調査）に分かれる。

## 第51-1次調査

調査地を道路交差点で、北から南に向かって便宜上1~5区に区切り、調査を行った。

## 1区の調査

ピットが5基、溝の可能性が高い落ち込み1ヶ所が確認されたのみである。ピットからは土器の小片がわずかに出土しただけで、時期の詳細は不明である。

## 2区の調査

1区よりも遺構の密度が高く、特に中央部~南部にかけて多くなる。全体で、ピット13基、溝2条、いくつかの不定形な落込みを検出した。

ピットは直径10~20cm前後の楕円または円形である。SD01には、庄内併行期の土器が多く含まれる。南部では、落ち込みの肩部分にこの時期の壺が1個、完形な状態で出土した。

## 3区の調査

南半部ではピット、土坑が集中する。ピット21基、土坑1基、溝と推定される遺構6条が確認された。

## SK01

SK01は直径約70cm、深さ40cmの円形で、平安時代前期の土師器壺と20~30cm大の石を投棄している。SX01は幅2m以上の溝と考えられるが、遺構の真中にコンクリートの支柱基礎が埋設され、詳細を観察することができなかった。

## 4区の調査

北半部では、溝状の遺構2ヶ所と小型のピット数基が残存していた。溝状遺構のSX01からは、12世紀代の須恵器碗が出土している。

南半部では、溝状の遺構、落ち込み状の自然地形が確認された。落ち込みは、南に下がってゆき、飛鳥～平安時代後期の遺物を多く含む、黒褐色～暗褐色の粘質土が堆積している。これは、微高地から後背湿地に地形が移り変わる状況を示している。これらの遺物と共に、金環が1点出土した。

**5区の調査** 本来の堆積土が残った部分を観察すると、中世の耕作土以下は粗砂、シルト層が堆積し、水流の影響を受けやすい状況であることが判明した。4区南端の地形の変化と併せて考えると、国道28号線沿いについては、このあたりで御藏遺跡の南限と判断してよいであろう。

**第51-2次調査** 調査地を画する道路交差点で、北から南に向かってA、B、C区に区切り、調査を行った。

**A区の調査** 北半部は第45次調査地と南半部は第37-4次調査地と接する。遺物包含層、遺構検出層は削平が著しい。しかし、北半部では奈良～平安時代のピット、柱穴、溝が多数検出された。

**ピット・柱穴** ピットは一辺直径40～50cm程度の隅円方形のものが多い。およそ奈良～平安時代の時期の中に収まると思われる。なお、北半部に残存した遺物包含層から、鍍金された帯金具の一部（裏金具）が発見された。

**流路** 南半部では、飛鳥時代の流路が検出された。およそ3.5～4.5mの幅に収まり、深さは50～70cmを測る。堆積土内からは、飛鳥時代初頭から中頃の土器、木製品、部材等が出土した。出土した須恵器壺身には、漆の付着したものが見られる。

**柵遺構** 西側の肩に近い部分から柵遺構が確認された。これは、直径3～10cm程度の丸太杭を打



fig.151 51-1 3区全景

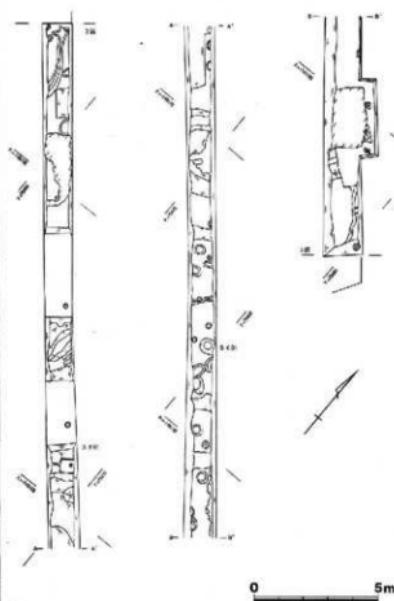


fig.152 51-1 調査区平面図

ち込み、建築部材を転用したと思われる枘穴を穿った長さ約3mの木材を護岸の土留めに用いている。また、流路の中からは飛鳥時代初頭～中頃の土器、木製品、木屑等が出土した。木材の樹種同定の結果を見ると、コウヤマキが多用されていることに特徴がある。

**集石遺構** 流路に直行するような状況で幅5～6m、深さ40cm程度の落ち込みが取り付く。流路との境目付近に拳大の川原石を大量に投げ入れていた。石の下からは、斎串などの木製品、部材、木屑、飛鳥時代前半～中頃の上器等が出土した。

この遺構の集石直下層から採取された種実化石から常時、水が溜まっている環境ではなかったと推定される。また、流路と集石遺構周辺からは、モモの核81点、ウリの種子1点が発見されている。

**胞衣壺** A区南半部の東壁より、土師器の甕が正立した状態で出土した。甕の上には蓋に用いられたと見られる土師器皿2枚、中に落ち込んだ状態で1枚、横に置かれた状態で2枚の合計5枚の皿が発見された。また、甕の口縁部から少し中に入った位置に獸骨らしいものが1点出土した。蓋に用いられた2枚は甕の口の部分からはずれた状態で出土している。

これらの器の埋納された理由は不明であるが、胞衣壺の可能性を指摘しておきたい。甕や土師皿の時期は10世紀代と考えられる。

#### B区の調査

##### 流路

北半部は第37-2次、南半部は第37-1次調査地とほぼ接する。

北半部では、流路が検出された。幅1m、深さ20cmほどであるが、本末は、幅1.5～2



fig.153 51-2 A区流路・集石遺構

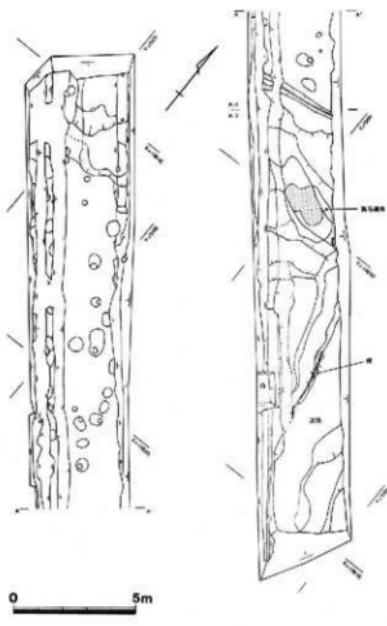


fig.154 51-2 A区平面図

m、深さ60cm以上あったようである。上層堆積土からは、12世紀代の上器が出土している。この流路は、位置関係からみて、第37-2次調査で確認されたものと同一であると判断される。

#### C区の調査

第26-2次調査地と接する。小規模なピットが2基、確認された。この周辺ではA、B区でみられたような遺物包含層（暗褐色粘質土）はみられず、少量の遺物を含む褐色砂質土がみられるのみである。

#### 3.まとめ

今回の調査では、御藏遺跡をほぼ南北に継続するような調査方法となっており、遺跡の範囲、上層の堆積状況のおよそを把握することができた。

特に51-1次調査2区南半部から3区にかけてや51-2次調査のA区において検出された遺構の密度が高い。過去の調査例でもこの周辺では、遺構、遺物が集中して発見されており、御藏遺跡の中心部と言えるであろう。

また、出土遺物については、飛鳥時代前期～中頃の遺物がA区から大量に出土し、あまり明確でなかった当該時期の土器様相の一端を明らかにできたものと考える。また、壺串等の木製品等と考え合わせて、飛鳥時代における御藏遺跡のあり方を、再考させる良好な資料を提示したと評価できる。さらに鍍金された帶金具については、在地の有位者、あるいは国司クラスの人物の所持品であったであろうが、いずれにせよ、当遺跡が地方官衙となんらかの関わりを持っていたことを示す資料と言える。



fig.155  
51-2 調査区全景

## 19. 水笠遺跡 第22次調査

### 1. はじめに

神戸市長田区水笠通の地下に、遺跡が存在すると知られるようになったのはごく最近のことである。

長田区は神戸市内でも、阪神大震災による被害が最も大きかった地区の一つである。震災後、復興土地区画整理事業がJR新長田駅周辺で行われることとなり、水笠通地区もその対象範囲に入っていた。区画整理事業の工事に先だって対象地区に遺跡が存在するか、試掘調査を実施したところ、水笠通2丁目から3丁目にわたる地区に、これまで存在の知られていなかった遺跡があることが判明し、水笠遺跡と名付けられた。

これまでに行われた発掘調査によって、水笠遺跡は、茹藪川の流れによって形成された沖積地の上に存在し、弥生時代、古墳時代、さらに中世の複合遺跡であるということがわかつてききた。

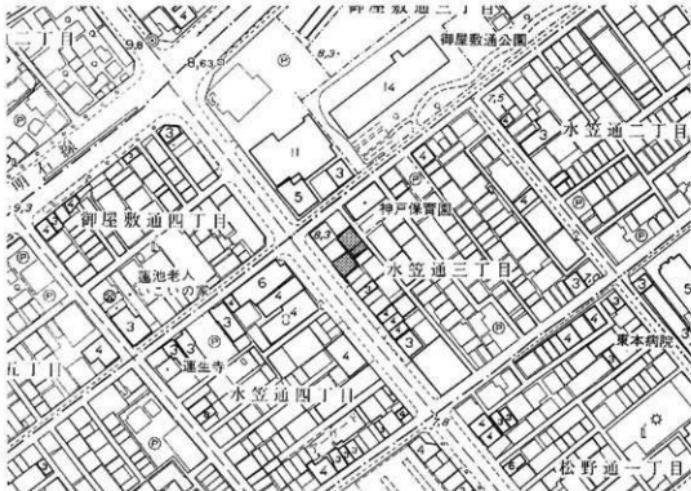


fig.156  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査で確認できた遺構は、溝が2条と直径35cm、深さ40cm程度のピットが2基である。

#### S D01

南側の調査区で検出された、南北方向にのびる溝で、深さが10cm程度と浅いため、現代に田圃の段によって削平を受け途切れている。

#### S D02

S D02は、北側の調査区で見つかった東西方向に長い溝である。溝は、一部現代の建物の基礎によって壊されていたが、北側の調査地を縦断するように、5m以上の長さで残っており、さらに東西に、調査区外へ拡がるものと思われる。溝の深さは10cm程度である。

この2条の溝の中には、遺構面の直上に堆積していた包含層の粘土が堆積していた。南側のS D01については、まったく遺物が出土しなかったため、溝の時期が判定することが

出来なかった。SD02については、堆積土より中世のものと思われる須恵器の破片が出土したため、中世の可能性はあるものの上層からの出土であるために断定はできない。

**ピット** 南側の調査区には、直径約35cm、深さが40cm程度のピットが2基確認された。いずれのピットからも遺物がまったく出土しなかったため時期は不明である。

**3. まとめ** 今回の調査地では、発見された遺構は少なく、地層の堆積の様子からみて、当該地周辺での遺跡の保存状態は良好ではなかったといえる。これは、中世から現代までの長い期間にわたる繰り返しの耕地化のためと考えられる。

これまでの成果でも、弥生時代や古墳時代、あるいは中世といった時代の遺構が発見されているが、住居の跡など、集落遺跡の中心部分はまだ発見されていない。遺跡の存在が明らかとなってから、まだ日が浅いこともあり、水窓遺跡の実態はまだ正確につかめていない。今回の調査においても、出土した遺物の量が通常の遺跡の発掘調査に比べて極端に少なく、このことは集落遺跡の中心地からはずれた場所であると考えられる。

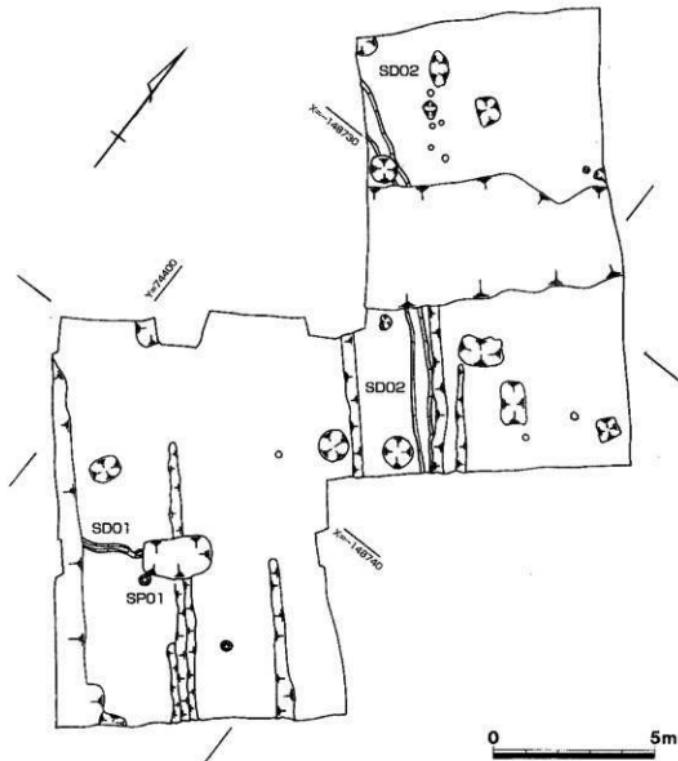
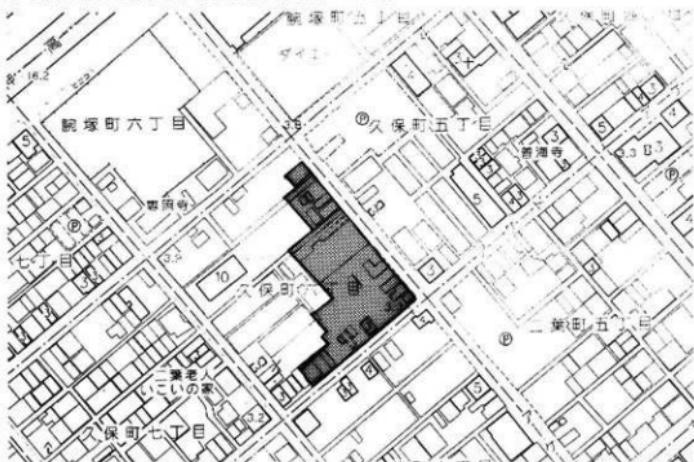


fig.157  
調査区平面図

## 20. 二葉町遺跡 第16次調査

### 1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系南麓の長田区南部に位置する。遺跡の南には古文書にみられる『小馬林渓』と推定される長田漁港が立地し、標高は4m前後、海から500m内陸に立地する。この辺り一帯は明治以降、急速に市街地を形成し、木造家屋や町工場が密集した地区であった。平成7年1月17日の阪神淡路大震災によって、当地区は、甚大な被害を受け、市街地再開発事業を導入して、街を再建することとなった。それに伴う埋蔵文化財の調査が平成8年から行われ、現在も調査継続中である。



### 2. 調査の概要

#### 基本層序

基本層序は、アスファルト、パラス、焼土、瓦礫（震災後の整地層）、黒色～黒灰色砂質土（部分的にたたき土間を含む・震災前の表土、盛土層）、灰色～黄灰（褐）色砂質土（中世耕作土）、黒褐色砂質シルト（局部的に堆積・部分的に中世耕作土）、黒灰色粘質土（遺物包含層）、黄灰色～淡灰黄色粘質土（遺構検出面）である。

現況は、北西～南東にむけて徐々に下がっていく地形であり、遺構面のレベルは標高3.5m前後を測る。遺物包含層には、奈良～鎌倉時代の土器を含むが量は少ない。

#### 第16-1次調査

##### 遺構

遺構は掘立柱建物2棟、溝、ピット、土坑を検出した。

##### 掘立柱建物

調査区の南東端で検出した4間以上の建物で大半が調査範囲外である。柱間の距離は2

##### S B01

~2.2mである。

##### S B02

S B01に接して検出された建物遺構で、2×1間以上の大きさがある。1.8~2.4mの不等間の建物で東側の柱穴は検出されなかった。これらの建物の時期はおよそ平安時代末～鎌倉時代前半のものと推定される。

##### S D02

調査区を北西から南東方向に縦断した溝で、この地域に施行された条里遺構の方向に則

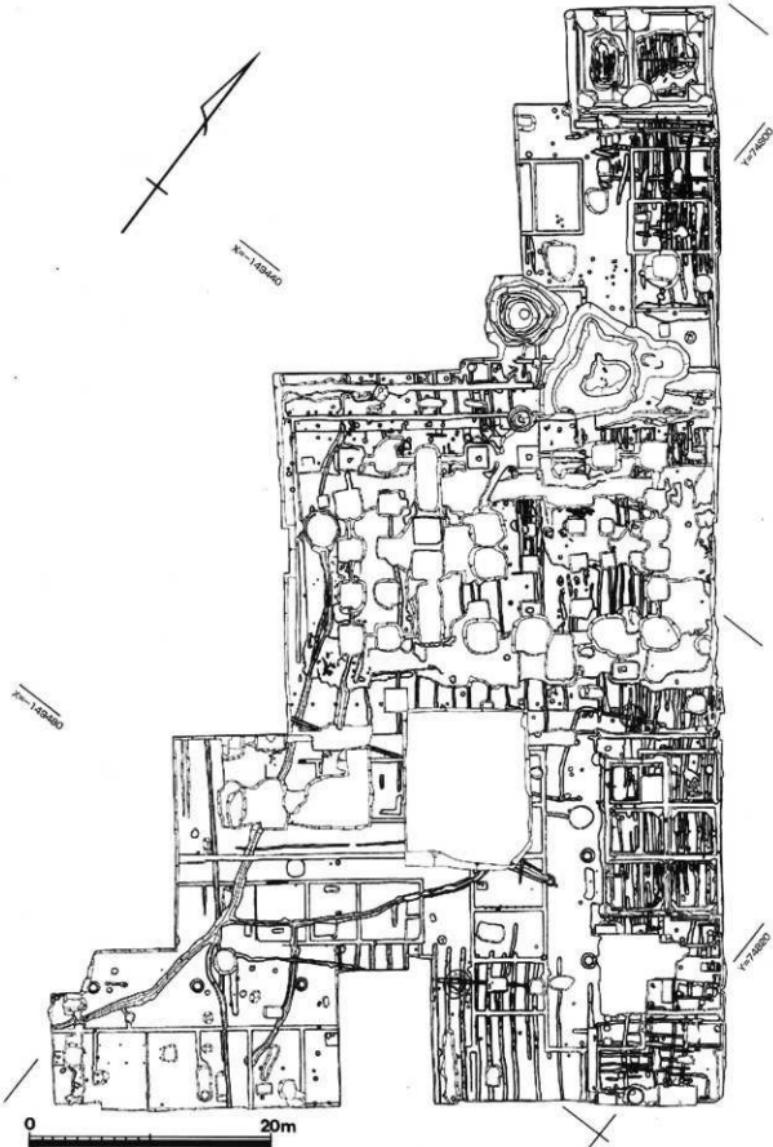


fig.159 調査区平面図

るのではないかと推定される。長さ30m、幅30cm前後、深さ30~40cmである。1、2区の接する所で、土坑SK01に一旦流れ込み、オーバーフローしたものが流れ出すものと、上坑を迂回して流れるものが認められる。

**S D06** 調査区中央部で確認された浅い溝で、SD04を切って、土坑SK01に流れ込む。幅5~20cm、深さ5cm前後である。

**畝の痕跡** 調査区の中央部で幅30cm、深さ10cm前後の溝5条を確認した。それぞれが、70~80cmの間隔で平行に並んでおり、畠の畝立ての痕跡と推定される。これらの遺構はSD06を切って掘り込まれている。また、2区北端で発見された小溝3条は、いずれも浅く、鋤溝の可能性が高い。

**SK01** 直径1.5m、深さ80cmほどを測る。部分的に袋状にオーバーハングする。何条かの溝の水を集めて、オーバーフローした水をさらに流すという機能を持っている。少量の須恵器、土師器が出土した。

**SK02** 2区中央で確認された直径1.5m、深さ70cmほどの上坑で、逆台形もしくは、部分的に袋状にオーバーハングする。遺物は出土していない。

**ピット** 1区南端でピットを数基検出したが、建物としての縛まりを確認するには至らなかった。

#### 第16-1次調査

**遺構** 遺構は、溝、ピット、鋤溝を検出した。

**SD01** 第16-1次調査区で検出されていた溝の続きである。当調査区では緩いS字に蛇行しており、中間地点では二筋に別れて再び合流している。このことから、この溝は一過性のものではないものと考えられる。遺物は出土しなかった。

**鋤溝** 調査区の東半分では、幅30cm、深さ10cmの鋤溝群を検出した。溝の方向は、現在の条里とほぼ平行している。

#### 第16-2次調査

**遺構** 挖立柱建物8棟、井戸7基、不明大型土坑3基、不明土坑1基、ピット、土坑、溝、鋤溝多数を検出した。

**掘立柱建物** 北地区でSB03・04の2棟、中央地区でSB05・06の2棟、南地区でSB07・08・09・10をそれぞれ検出した。

**SB03** 大半をSX01とSX02~04に切られて消滅しているが、北辺部の梁間2間と桁行2間分を検出した。柱穴は直径18~40cm、深さ8~32cm、柱間の距離は梁間で2.5m、桁行で2.1mを測る。北辺部梁間の西隅柱穴の南延長6.3mに相対する柱穴が検出されていることからN-34°-Wに主軸をもつ2間×3間の掘立柱建物と考えられる。

**SB04** 南半分がSX02~04により欠失しているため建物規模は不明であるが、北辺部の2間分を検出した。柱穴は直径24~30cm、深さ20~26cm、柱間の距離は2.2mを測る。

**SB05** 平成12年度に実施した第12次調査の南側に隣接する地区であり、その折の調査結果では、6棟の掘立柱建物と多数のピットが検出されていた地点である。この建物は、その時に検出されたピットと整合した結果、N-35°-Wに主軸をもつ梁間2間×桁行4間の掘立柱建物であることが判明した。柱穴は直径20~30cm、深さ22~35cmで、柱間の距離は梁間で1.5m、桁行で1.8mを測る。柱穴には根石を持つものや、須恵器の碗を埋めたものなどが

検出された。

**S B06** 第16—2次調査区で検出した柱穴列の続きを検出した。西半分が未調査地区となつてゐるため建物規模は不明であるが、北西方向三間と南東方向一間を検出した。柱穴は直径25~36cm、深さ34~43cmで、柱間の距離は北西方向三間が2.2m、南東方向一間が2.5mを測る。

**S B07** 南地区的北端で検出した、N-26°-Wに主軸をもつ梁間2間×桁行3間の掘立柱建物である。柱穴は直径15~50cm、深さ10~42cmで、柱間の距離は梁間で2.4~2.8m、桁行で2.3mを測る。

**掘立柱建物群** 南地区的大正筋に面したほぼ中央南よりの地点において集中して検出した掘立柱建物群である。東側は大正筋、西側には地下室が設けられていたため未調査地と攪乱に挟まれた、狭小な範囲であるため、いずれも正確な建物規模は判然としない。

**S B08** 北西方向二間と南東方向一間を検出した。柱穴は直径30~45cm、深さ30~50cmで、柱間の距離は北西方向二間が2.2m、南東方向一間が2.5mを測る。

**S B09** S B08と重なるように検出した北西方向二間分と南東方向一間を検出した。柱穴は直径30~50cm、深さ15~50cmで、柱間の距離は北西方向の二間は真ん中の柱穴が攪乱により検出されなかつたため不明であるが、南東方向一間が2.3mを測る。

**S B10** S B09の南で北西方向二間と南東方向一間を検出した。柱穴は直径18~28cm、深さ15~30cmで、柱間の距離は北西方向二間が2.2m、南東方向一間が2.1mを測る。

**ピット列** S B08の東には北西方向二間の柱穴列が検出されているが、建物を構成するものとは現時点では判断できないが、ピットの直径24~34cm、深さ33~38cmで、ピット間の距離は北西方向二間分で1.8と2.4mと不揃いである。

**井戸** 7基確認したが、S X01は当初、不明大型土坑として扱っていたが、調査の結果、近世の井戸と判明したので、S X(不明遺構)としているが井戸として報告を行う。また、單



fig.160  
16-3次  
調査区全景



fig.161 S X01



fig.162 S B05

なる土坑ではなく井戸として扱う基準として、直径50cm以上、垂直に掘り込まれ、底部に湧水部としての窪みのあるものを井戸としている。

**S E01** 直径2mの円形プランである。掘り込みは緩やかであり、深さ1mで底は、粘土層内で留まっており、湧水層までは到達していない。しかし、上層の砂層から押し水があるため調査中においても常に水が蓄えられていたことから、溜め井としての用途が考えられる。

**S E02** 遺構検出面では、直径2.2mの円形プランである。検出面から70cm下がったところで、一辺が1.5mの方形プランとなっており、ほぼ垂直に掘り込まれていることから、井戸側として板などの構造物があったものと思われるが、抜き取りのために何も出土しなかった。

また、検出面から2.1m下がったところで直径40cmの円形で、40cm垂直に掘り込まれていることから、湧水部として曲物が存在していたと考えられるが、これも抜き取りによって出土しなかった。

**S E03** 直径2.2mの円形プランである。掘り込みは緩やかであり、深さ1mで底は、粘土層内で留まっており、湧水層までは到達していない。しかし、上層の砂層から押し水があるために調査中においても常に水が蓄えられていたことから、溜め井としての用途が考えられる。

**S E04** 直径90cmの円形プランである。掘り込みは垂直で、深さ1mで底は、粘土層内で留まっており、湧水層までは到達していない。しかし、上層の砂層から押し水があるために調査中においても常に水が蓄えられていたことから、溜め井としての用途が考えられる。

**S E05** 直径1.2mの円形プランであるが、西半分をコンクリート基礎により消失している。掘り込みは緩やかであり、深さ70cmで底は、粘土層内で留まっており、湧水層までは到達していない。しかし、上層の砂層から押し水があるために調査中においても常に水が蓄えられていたことから、溜め井としての用途が考えられる。

**S E06** 直径70cmの円形プランであり、もっとも規模の小さなものである。掘り込みは垂直で、深さ70cmで底は、粘土層内で留まっており、湧水層までは到達していない。しかし、上層の砂層から押し水があるために調査中においても常に水が蓄えられていたことから、溜め井としての用途が考えられる。

**S X01** 12次調査の際に不明大型土坑として認識していたものであるが、東半分を今回の調査により完掘した結果、近世の焼瓦と共に桶が4段積み重ねて出土した。検出面での掘形直徑は、約6mである。桶が検出される検出面から1.8mまでは、粘土層ごとに幅20cm前後

のテラスを設けて階段状に掘り込んでいる。検出面から1.8m～5mmでの間に4段分の桶が井戸側として設置されているが、1段目は腐食が激しく下端が検出するのみであった。このことから、さらに上部にも桶が存在した可能性がある。4段目の桶の下には一本を刎り貫いた円筒状の部材を確認したが、崩壊する危険が高まったために取り上げを断念した。

**不明大型土坑** 16-3次調査の北地区の南端において、切り合って検出した。

S X02～04 S X02は直径8m前後で、深さ1mのレンズ状の落ち込みであり、その北側に三角形の2箇所の飛び出しがS X03、S X02の東に舌状の飛び出しがS X04とした。それぞれの初期堆積には黄褐色系の細砂が堆積しており、遺構面での検出時には細砂による輪郭が明瞭に確認された。出土遺物は、室町時代の甕などの須恵器や羽釜などが出土した。堆積状況から洪水などで埋もれた溜め井を掘り返して修復しながら使用していたものと考えられる。

S X05 16-3次調査の北地区的北半ば中央において検出した。北西方向の長軸をとる長方形のプランである。短辺1m、長辺2mで南側短辺部には斜め方向に飛び出す溝が取り付いている。南には一段下がるテラスがあり、北半の底には浅い段差がある。よく似た形状の遺構が二葉町遺跡第8-2次調査でS X301として報告されている。

S K08 16-3次調査の南地区S B07の東に隣接して検出した。掻乱により南半分を消失しているが直径65cmの円形で、深さ15cmの掘り込みである。中からは、須恵器の甕と上器器の小皿が並べた様に出土した。出土状況から、地鎮などの祭祀を行ったものと考えられる。

S D09 16-3次調査の南地区の西隅で検出した。ほぼ東西の方向で検出したが、東端は突然途切れている。幅90cm、深さ50cmの断面は緩いV字形をしている。弥生土器片が出土した。

S B10 S B07の北辺と西辺を囲むように検出した。南端は西方向に直角に曲がって続いている。S B07との位置関係から雨落ち溝などが考えられる。

**動 溝** 多数の動溝を主に東半分に集中して検出した。16-3次調査北地区と16-3次調査南地区の大正筋沿いでは縦横に動溝が錯綜しており、建物遺構などとの新旧は不明である。また、16-3次調査の南地区西南隅では、16-1次調査区から続く畠状の溝が検出された。これらの溝の底には、先の丸い農耕具による耕作痕が明瞭に残されている。

**3.まとめ** 約2,700m<sup>2</sup>の面的にまとまった範囲の調査を行った。検出した遺構は、掘立柱建物12棟、井戸7基、不明大型土坑3基、不明土坑1基、ピット、土坑、溝、動溝多数である。

あまり明確なものは見られなかったが、弥生土器を伴う溝（S D09）が存在することから、周辺で弥生時代遺構を検出する可能性がある。

掘立柱建物については、集中する範囲が限られており、概ね平安時代末～鎌倉時代前半の建物と考えられるが、建物の建て替えや同時存在の可能性を今後考えなくてはならない。

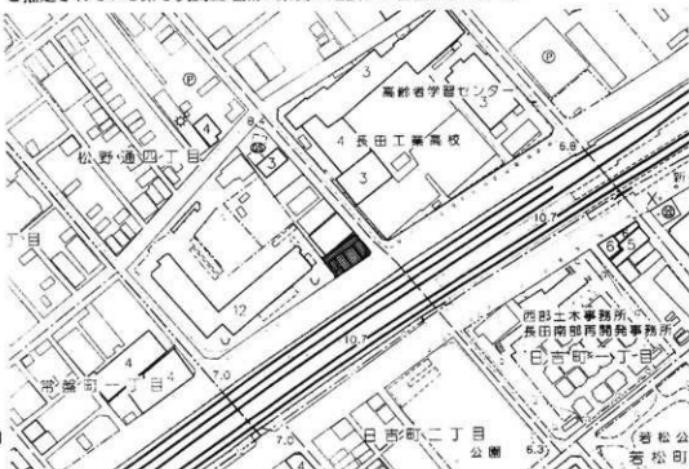
不明大型土坑については、同じところで繰り返し掘り直して使用していることが、土層観察によりうかがえる。時期については、掘立柱建物よりも新しい室町時代のものということが出土遺物から判明した。使用用途が耕作物に撒く水を溜める溜め井であると仮定した場合、周辺で検出された動溝についても同時期のものと考えられるが、建物に伴う柱穴に切られる動溝も存在することから、年代については切り合いなどで再考する必要がある。近世遺構の井戸として、S X01を1基のみ調査をおこなったが、かなり深く立派な井戸を構築していることから、近世にも集落が存在していたことがうかがえる。

## 21. 松野遺跡 第35・36次調査

### 1. はじめに

今回の調査は、個人住宅建設に伴い実施したもので、調査地は、古墳時代中期の豪族居と推定されている第1次調査地点の東側に近接する位置に相当する。

fig.163  
調査位置図  
1:2,500



### 2. 調査の概要

調査区東端部は、既存の建物の基礎工事で搅乱されている。また、調査区全域が、遺構面直上まで中世以降の耕作の影響を受けており、遺物包含層は調査区西半部分の一部を除き残存しない。西半部分で2面の遺構面が検出されたが、調査区の大部分は、遺構面が1面検出されたにとどまる。

#### 検出遺構

古墳時代中期後半から中世の遺構が検出された。溝、木棺墓、柱穴、杭穴が数基検出されたが、遺物が出土した遺構は少なく、時期を特定できる遺構は少ない。

#### 溝

4条検出された。SD 101を除き時期を確定することは難しいが、遺構の切り合い関係と埋土から、すべて同時期の遺構とは考えられない。

#### SD 101

幅40cm、深さ20cmの溝で、直線的に掘削されている。用途は不明である。埋土より、12世紀後半の遺物が少量出土した。調査区北壁面の層序の観察からも、当該時期に相当すると考えられる。

#### SD 102

幅20cm、深さ約5cm、全長約2mの溝である。用途は不明である。

#### SD 103

遺構が調査区外に伸びるため、全体の形状は不明である。深さ10cm以上の溝と考えられるが、判然としない。

#### SD 104

幅40cm、全長約5.7m、深さ約10cmの溝である。SD 102に切り込まれており、遺構の前後関係からは、もっとも古い遺構である。SP 101と共に通ずる埋土を含む。

#### 木棺墓

幅100cm、長さ160cmの隅丸方形の墓坑から、幅35cm、長さ100cm、深さ10cmの木棺の痕跡が検出された。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

**柱穴・杭穴** 約20基検出されたが、建物としてまとまるものはない。SD101を切り込む例と、古墳時代の遺物を出土した例（SP101）が存在し、異なる時期の遺構が同時に検出された。

**SP101** 長径40cm、短径25cm、深さ15cmの柱穴である。埋土から、古墳時代中期後半の遺物が少量出土した。埋土はSD104と共に通しており、当該時期の遺構と考えられる。

### 3. まとめ

遺構面の残存状況が悪く、第1次調査で検出された遺構と直接関連する資料を得ることができなかった。同時期の遺物や遺構は検出されたが、検出密度は極めて低い。第1次調査区で検出された集落に近接しているながら、遺構や遺物の検出量に大きな差が見られたのは、遺構面の残存状況に起因するものか、集落を隔する柵の内外の格差が現れているためか判然としないが、特殊な集落の周辺の様相を考える上での資料といえる。

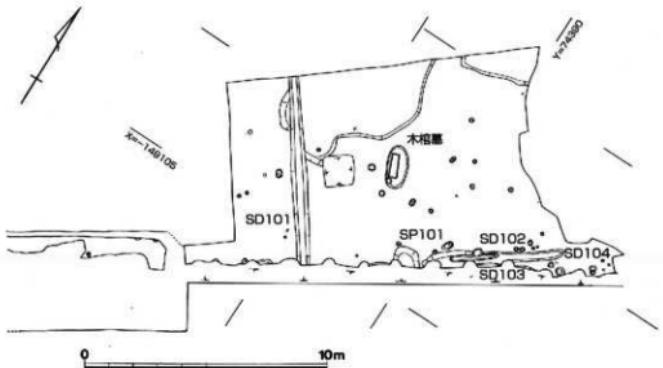


fig.164  
調査区平面図



fig.165  
調査区全景

## 22. 戎町遺跡 第37・40・41・42・43次調査

### 1. はじめに

戎町遺跡は、妙法寺川左岸に位置し、縄文時代晩期～古墳時代・中世にかけての遺跡である。この遺跡は、北は山陽電鉄板宿駅の北側から南は大田町交差点いたる東西400m、南北600mの範囲に広がるものと推定されていたが、阪神・淡路大震災以後大田町南側の寺田町一帯が、鷹取東地区復興区画整理事業予定地となり、平成12年度に試掘調査を実施した結果、多量の弥生時代中期の土器を含む遺物包含層が検出された。このことにより、戎町遺跡の範囲は大きく南東方向へ広がることとなった。その後、平成13年区画整理事業地の街路予定地部の調査では、弥生時代中期の竪穴住居などが発見された。

今回の調査は、この区画整理事業地内の個人住宅等の建設に伴う発掘調査である。

fig.166  
調査位置図  
1:2,500



fig.167 第37次調査区全景



fig.168 第40次調査区全景

## 第37次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査地の基本層序は、現代の盛土層の下層に旧耕土層が存在し、この下層に黒褐色粘質土（弥生時代中期後半遺物包含層）・暗灰褐色シルト（第1遺構面・弥生時代中期遺物包含層）、・暗灰褐色シルト（第2遺構面・地山層）となっている。

#### 第1遺構面

S D101

弥生時代中期後半の遺構面である。溝2条、土坑2基、ピット11基を検出した。

調査区の北端部で検出した、幅1.3m前後、検出面からの深さは北側で35cm前後、南側で45cmの、北東から南西方向の溝である。埋土は2層に分かれ、上層から暗褐色シルト、下層は北側では淡灰褐色シルト、南側では暗淡褐色シルトとなっている。埋土中から弥生土器片が比較的多く出土した。

S D102

調査区中央を東西に流れる溝で、西側はS D101に切られている。幅は最小で2.1m、最大3.5m、深さは東側が深く検出面から55cm、西側では20cm前後である。底部では東側を中心に弥生土器、銅鏡などが出土している他、埋土中から弥生土器片が比較的多く出土した。

#### 第2遺構面

S K201

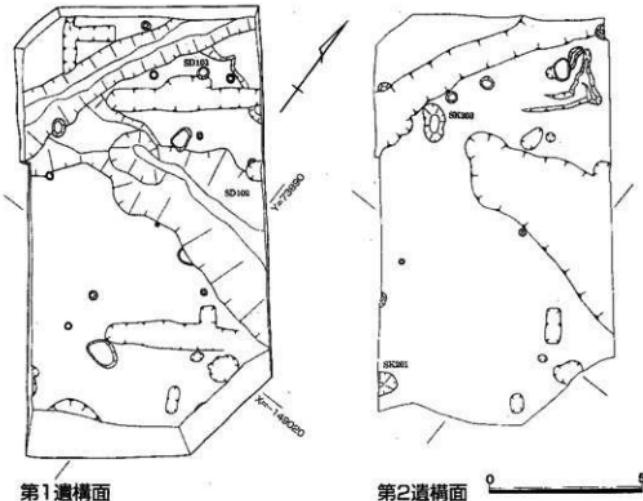
弥生時代中期の遺構面である。土坑3基、落ち込み状遺構2基、ピット6基を検出した。調査区南端部西側で検出した径80cm前後、検出面からの深さ15cmの土坑であるが、西側は調査区外側へと続き、全体の規模は不明である。埋土は褐灰色砂質シルトである。壺1個体分が出土した。

S K203

調査区北半部西側で検出した。全長1.25m、幅70cm、検出面からの深さ15cmの土坑である。埋土は淡灰褐色シルトで、弥生土器が出土した。

### 2. まとめ

調査の結果、2面の遺構面を検出した。第1遺構面では2条の溝を確認したが、多くの遺物が出土した。近隣地では、街路部分及び個人住宅等の建設に伴う発掘調査が進行中であり、調査の進展により、戎町遺跡の南側の様相が明らかになるものと考えられる。今回の調査は、その上でも貴重なデータといえよう。



## 第40次調査

**1. 調査の概要** 今回の調査は、住宅建設に伴い工事により埋蔵文化財に影響の及ぼす範囲約20m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。今回の調査地の標高は約11mの高さに位置している。

**基本層序** 層序は、上層より盛土、耕土、遺物包含層である黒灰色シルト、そして遺構面である黃灰色細砂質シルトとなる。

**遺構** 現地面から約25cmの深さの遺構面において溝7条を検出した。いずれの溝も、幅30~40cm、深さ10~15cm程度である。溝内から時期不明であるが土器が少しあり出土している。記入の可能性もありこの溝の時期の決めるには至らない。

なお、調査区の大半が搅乱されていて、溝以外の遺構は確認されなかった。

**2. まとめ** 遺構面までの深さは浅く、旧耕土・遺物包含層もかなり削平されており今回の調査ではいつの時代の遺構面であるか判断できなかった。検出された溝は方位に対して直角に掘られている。溝の底には鋤の痕跡が認められることから、耕作に伴う溝と考えられる。周辺の調査においても、同一方向・規模の溝が確認されているため、ある時期この周辺には畑が広がっていたと予想される。

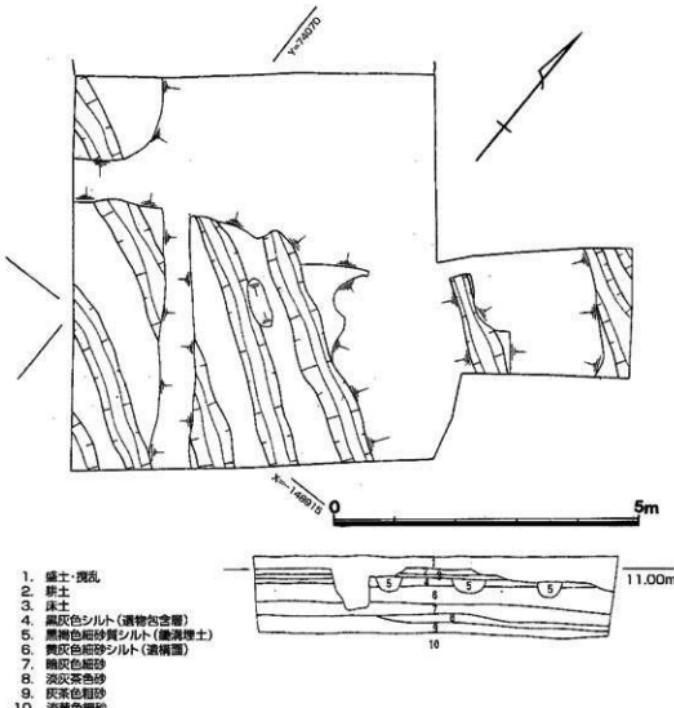


fig.170  
調査区平面図・断面図

## 第41次調査

### 1. 調査の概要

調査は、北東部約10mほどを家屋の移転および生活道路の確保等のために残したため、2回に分けて実施した。(第41-1・2次)

### 基本層序

基本層序は、道路面下70cmまで表土・旧耕土が堆積し、その下に厚さ10cm前後の暗褐色粘性砂質土の遺物包含層が見られる。調査区北側では、南北に掘られた下水道埋設坑によって削平され、遺物包含層は検出されずに第1造構面の暗褐色砂質土となる。この暗褐色砂質土は堅致で、厚さ25cm前後あり、少量の弥生土器が含まれ、下層に地山である黄褐色粘性砂質土の第2造構面を被覆している。

### 第1造構面

検出遺構は調査区中央部東よりで検出した円形の堅穴住居1棟とピット3基である。

#### S B01

検出した堅穴住居は、ほぼ正円で規模は直径8.0mで、東側は調査区外となる。壁体は30cm前後残り、住居址の壁沿いに幅30cm、深さ12cm前後の周壁溝がめぐる。周壁溝内は暗灰褐色細砂質土が充填され、板材等の痕跡は検出されなかった。住居址床面は周壁底面より3~4cm前後上まで掘り込み、北側で4~5cm、南側から中央部で10~22cm前後の灰褐色砂質土を敷いて床面としている。

床面中央において長径140cm以上、短径約75cm、深さ約50cmの土坑を検出した。住居址内の検出位置から中央土坑と考えられる。周辺から焼土などは検出されなかった。

また大小23基のピットが検出された。うち10基については、40cm~60cm前後の方形掘形で掘形底に柱痕跡および抜き取り痕跡が見られる。これらの方形柱掘形は対に検出され、いずれも内側の柱掘形が外側の柱掘形に切られている。柱掘形の深さは35cm前後で、北側の外側柱掘形の抜き取り掘形内から壺が1個体分出土している。これらの方形掘形のピットが支柱穴と考えられるが、その堅穴住居内での位置は南側に偏っていて、位置関係を確定できていない。



fig.171  
第1造構面全景

出土遺物は、床面上で検出された少量の土器片、柱穴抜き取り掘形内の土器と豊穴住居廃絶後の埋没土最上層から出土した多量の土器がある。この埋没土最上層の土器は壺を主体とし、豊穴住居の支柱抜き取り掘形内出土のものとの時期に大差はない。

**ピット** 調査区北側で3基のピットを検出した。いずれも浅く柱痕跡を残すものもあるが、調査面積が狭小であるため、S B101に付属するものか、他に属するか不明である。

**第2造構面** 土坑4基とピット5基を検出した。

**S K201** 調査区北西側壁沿いで検出した長方形の土坑である。長径118cm、短径推定60cm、深さ16cmを測り、断面形は舟底状である。暗茶褐色砂質土の埋土内からは弥生土器片が出土している。

**S K202** 調査区中央西壁沿いで検出した楕円形の土坑である。土坑の北西側は近現代の掘り込みによって破壊されている。推定長径140cm、短径80cm、深さ30cmを測り、断面形は皿状である。土坑内の埋没土は、弥生土器を含む暗灰黄色砂質土が先ず流れ込み、後に暗灰色粘性砂質土が堆積している。

**S K203** 調査区南西隅で検出した楕円形の土坑である。土坑の大半は西側調査区外となる。推定長径150cm以上、短径90cm前後、深さ23cmを計測し、断面形は皿状である。土坑内の埋没土は、弥生土器を含む暗灰黄色砂質土が先ず流れ込み、後に暗灰色粘性砂質土が堆積しているのは、S X202と同様である。

**S K204** 調査区南東部で検出したやや歪な円形の土坑である。土坑の南側はガス管敷設坑によって破壊されている。長径140cm、短径120cm、深さ30cmを測り、断面皿状である。土坑内の埋没土は黒灰色粘性砂質土で、多量の弥生土器を含んでいた。

**ピット** ピットは5基を検出した。うち3基については直径20cm、深さ30cmで120cm間隔で直線に並んでおり、掘立柱建物が東に広がり存在する可能性がある。残りの2基も直径25cm前



fig.172  
第2造構面全景

後の小型ながら、深さ20cm～30cm前後を測る。SK201と方向が平行し、SK201に付属していた可能性も考えられる。

#### 出土遺物

出土遺物は、弥生土器（28ℓコンテナ18箱）・磨製石包丁2点・サヌカイト製打製石鉄3点とサヌカイト片などが出土している。磨製石包丁・打製石鎌とも堅穴住居SB101上面乃至は最終堆積層から出土している。弥生土器の大半は堅穴住居SB101埋没土内から出土し、未整理のため明確ではないが、弥生時代中期後半の土器と考えられる。

#### 2.まとめ

今回の調査では、小規模な調査ながら直径8mの円形堅穴住居の半ばを検出し、平成13年度の調査で検出した同時期の堅穴住居群が北側にも継続することが明らかになった。

検出された堅穴住居は、最終埋没土内に弥生時代の第Ⅲ様式後半の壺を多量に投棄しており、住居の使用時期を弥生時代中期後葉を中心とする時期が推定される。堅穴住居を検出した遺構面の下層で検出した土坑4基のうち、西側の3基は遺物の出土が微少で明確ではないが、東側で検出したSK204出土の壺から弥生時代の第Ⅲ様式内に収まるものと考えられる。これらのことから今回の調査区で検出した二つの遺構面はそう時期を避けずに営まれたと考えられる。

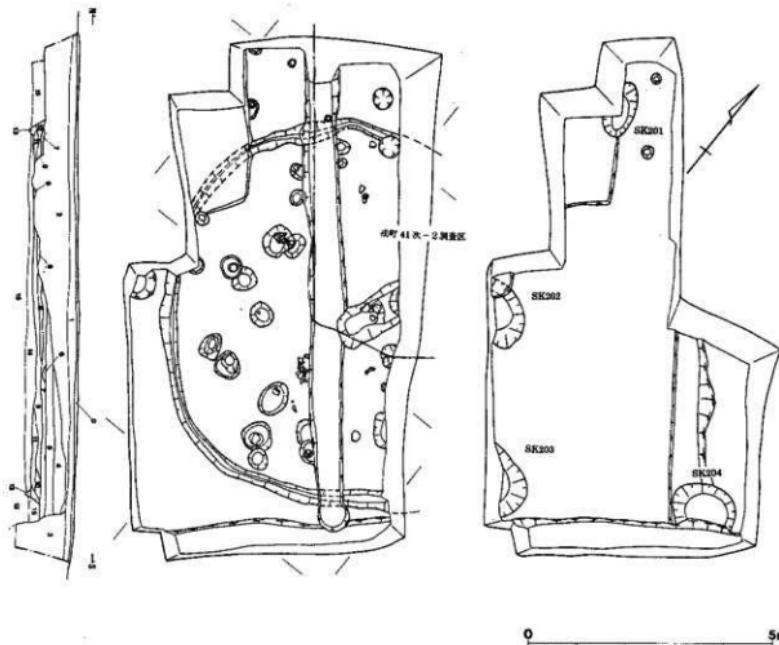


fig.173 第1・2遺構平面図・断面図

## 第42次調査

**1. 調査の概要** 当初は基礎部分の全面を調査する予定であったが、調査地が戎町遺跡の東端にあたると考えられ、中世の造構面で検出した流路以外は造構の検出も皆無であったために、約1/3を調査しただけで終了している。

**基本層序** 基本層序は盛土、淡褐色砂質土、黒灰色砂質土（上面が中世流路の存在する造構面）、淡灰褐色砂質土、淡黄灰褐色砂質土、淡黄灰褐色砂質土、となる。

淡褐色砂質土には、中世の遺物を少量含み、黒灰色砂質土には、時期不明の土師器片を少量含んでいる。

**中世の流路** 調査地の西端で検出された。建物の基礎部分だけのトレンチ調査であるために、形状については不明である。幅約1.2m以上で、深さ約30cmを測り、北西から南東方向に延びる流路である。埋土は淡褐色中砂～粗砂であり、摩滅した中世の羽釜片や、同じく摩滅した須恵器碗の破片が出土している。

**2. まとめ** 今回の調査で検出された造構は中世の流路のみである。より下層の黒灰色砂質土にも時期不明な土師器の小片を含むが、造構は確認していない。

42次調査に隣接して実施されている調査でも、遺物の出土量は少なく中世の流路が検出されただけである。周囲は戎町遺跡の東端に近く、流路以外の遺跡に伴う造構は存在稀有な地域だと考えられる。

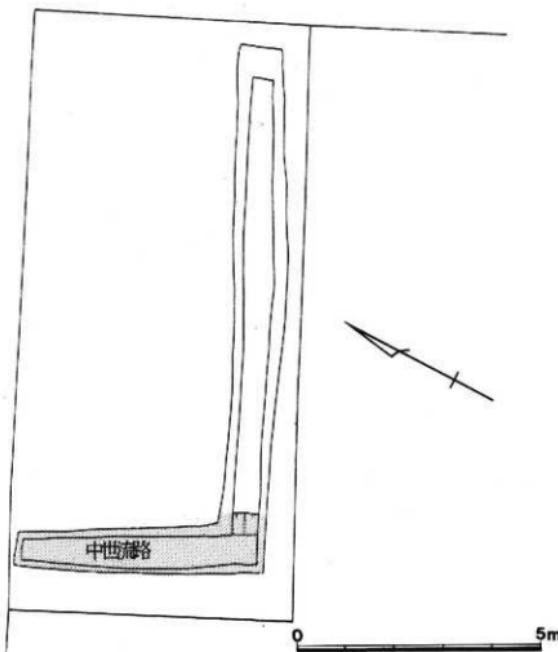


fig.174  
調査区平面図

## 第43次調査

### 1. 調査の概要

調査の結果、中世1面・弥生時代2面、計3面の遺構面が検出された。各面の概要は以下のとおり。

#### 第1遺構面

洪水砂5b層に覆われる中世の遺構面。7a層上面で検出される。溝S D01および土坑S X01、牛の蹄あと等を検出した。

S D01

幅約1m・深さ約10cmの溝。埋土は5b層。

S X01

径4m以上をはかるプラン円形の広く浅い落ち込み。底面は凹凸が目立ち、埋土は灰色砂質シルトで径~70mmの7a層のブロックを15%含む。掘り返された後すぐに埋め戻されたものと考えられる。

牛蹄あと

7a層を踏み込む蹄あと。集中する部分とそうでない部分が存在する。蹄あととの凹みには5b層が入る。

#### 第2遺構面

7a層下面で検出された弥生時代の遺構面。第43次調査地から南流する幅の広い溝S D09とその埋没後掘削される溝S D07・04・02、土坑S K01等が確認された。

S D09

幅約6m・深さ1.1mをはかる溝。南岸寄りは浅く、埋土も黒く土壤化しており、土器の集中して出土する部分(S X03)がある。一方、左岸寄りは底が深くなり、埋土も土壤化した土と砂を主体とするものの互層となっている。全体に上器の出土量が多い。

S D07・

S D09の埋没後掘削される溝で、幅0.8m~1.5m・深さ約1.1mをはかる。あるいは隣接

04・02

する第38-2次調査地で確認されたS D102がこれにつながる可能性が考えられ、この場

S K01

合、S K01が埋葬施設になるかもしれない。

#### 第3遺構面

9b層上面で検出される弥生時代の遺構面である。第43次調査分と併せ土坑7基(S K02~08)、柱穴多數が検出された。

S K02

約2.2m×約1.2mをはかるプラン不整長楕円の土坑。遺構確認面からの深さは約40cm

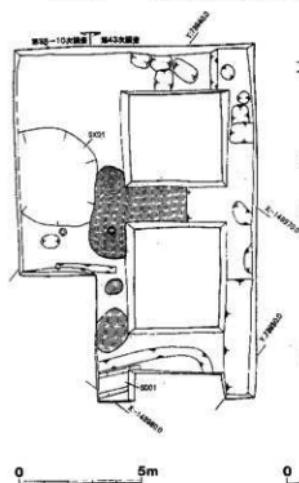


fig.175 第1遺構面平面図

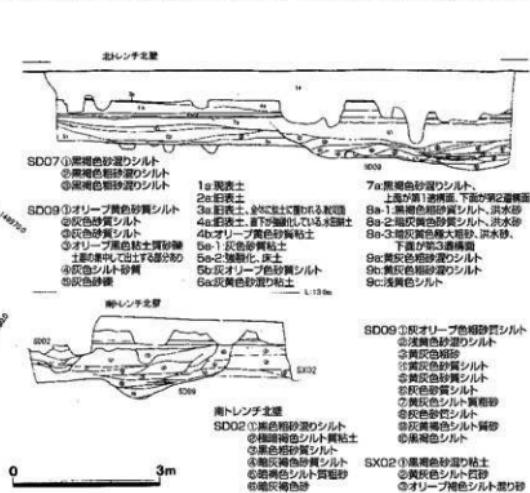


fig.176 調査区断面図

S K03よりも新しい。

**S K03** 径約1.6m、深さ0.8mをはかるプラン円形の土坑。S K02に切られる。

**S K04** 約1.5m×1.0mのプラン隅円方形の土坑。壁面がオーバーハンプグしており、その形状か



fig.177 S X03



fig.178 第2造構面全景

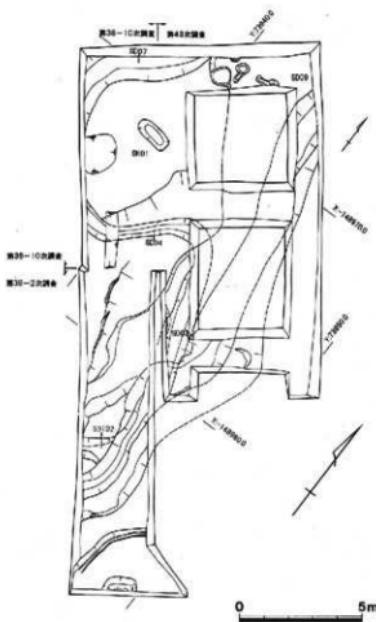


fig.179 第2造構面平面図

ら貯蔵穴であると判断される。深さ約40cmで中央部がさらに一段10cmほど下がる。埋土は炭層を主体とするが、木質は認められず、藁のようなものの炭化物と思われる。

S K07 S K04と切り合い関係にあり、S K04よりも新しい。一辺約1.2mをはかるプラン開円方形の土坑で、遺構確認面からの深さは約20cm。

柱穴群 周辺の調査区とあわせ確認すると、38-10次調査区周辺に柱穴が特に集中して存在することが認められる。ほかに弧状の細い溝なども検出され、平地式住居のようなものが数棟同じ位置に建てかえられている可能性も考えられよう。

## 2. まとめ

この地点周辺の発掘調査では竪穴住居をはじめ多量の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地でも多量の遺物が確認され、第3遺構面ではこの周辺が弥生時代の「戎町」ムラの居住域のなかで遺構密度の濃密な部分の一つになることを改めて確認できた。

また第2遺構面では方形周溝墓の可能性のある遺構が確認された。時代を進み、当地が墓域として利用されるようになった可能性がある。ただ南の隣接地での調査（35-8次調査）では同類の溝は確認されていない。S D09埋没跡の凹みが墓域の区画となっている可能性がある。

第2遺構面・第3遺構面とともに弥生時代中期の遺物が多く出土しているが、第2遺構面のものにはさらに新しい時期のものがある。遺物の整理作業を行ったうえでこれについて確認したい。



fig.180 第3遺構面全景

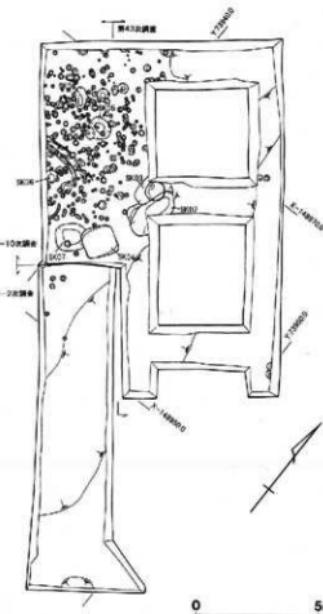


fig.181 第3遺構面平面図

## 1. はじめに

戻町遺跡は須磨区の東端部、妙法寺川左岸の沖積微高地上に位置する縄文時代～中世の複合遺跡である。過去の数次にわたる調査において数多くの遺構・遺物が確認されており、特に弥生時代においては、大集落を形成していたことが明らかになっている。鷹取東第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う第38次調査において弥生時代中期～古墳時代後期の遺構が確認された。



fig.182  
調査地位置図  
1:2,500

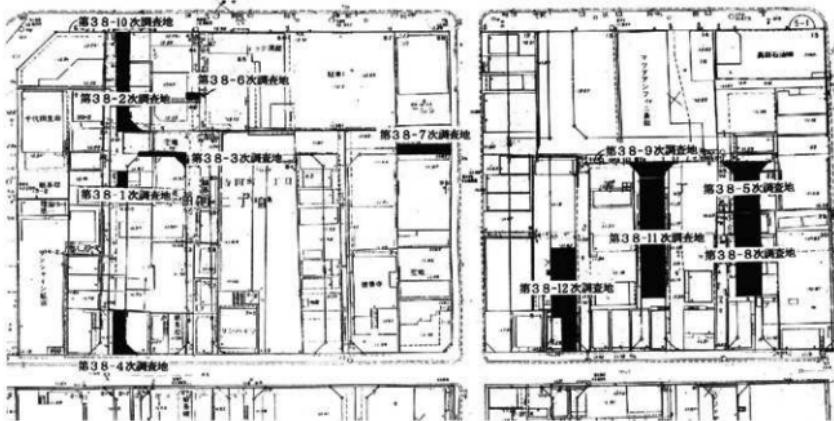


fig.183 調査区位置図

## 第38-1次調査

1. 調査の概要 層序は、搅乱・旧耕土を除去すると黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗褐色シルト層（第1造構面ベース層）、灰褐色細砂層（第2造構面ベース層）となる。第2造構面のベース以下層については造構面や遺物を包含する層位は確認されなかった。

第1造構面 造構面までの深さは現地表下80cmである。ピット10数基、溝1条、円形の落ち込み1基を検出した。

第2造構面 第1造構面のベースである暗褐色シルト層を除去し、第2造構面を形成する灰褐色細砂層上面で造構を検出した。検出した造構はピット10数基、溝2条、土坑2基である。

2. まとめ 第1造構面では、弥生時代第IV様式の土器が出土しており、第2造構面では弥生時代第III様式の土器が出土している。このことは、前年度の調査結果を追認する形となった。

## 第38-2次調査

1. 調査の概要 層序は、搅乱・旧耕土を除去すると黒褐色砂質シルト層（遺物包含層）、暗黄褐色シルト層（第1造構面ベース層）、明黒褐色砂質シルト層（遺物包含層）、明褐色細砂質シルト層（第2造構面ベース層）となる。

第1造構面 造構面までの深さは現地表下40cmである。溝2条、落ち込み状の造構1基、竪穴住居の一部と考えられる造構1棟を検出した。竪穴住居状の造構は、残高30cmほどで内部の土坑から弥生時代中期の遺物が出土している。

第2造構面 造構面までの深さは現地表下60cmである。この造構面において、溝1条とピット8基を検出した。溝からは、弥生時代のIII～IV様式の土器が多く出土している。

2. まとめ この調査区では、多くの造構や遺物を検出した。SD201が埋没し、次にSX101が形成されるが、この造構も本来は溝が複雑に切り合ったもの可能性がある。

## 第38-3次調査

1. 調査の概要 上層より盛土、旧耕土層、黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗灰黄色砂質シルト層（第



fig.184 38-1区第1造構面全景

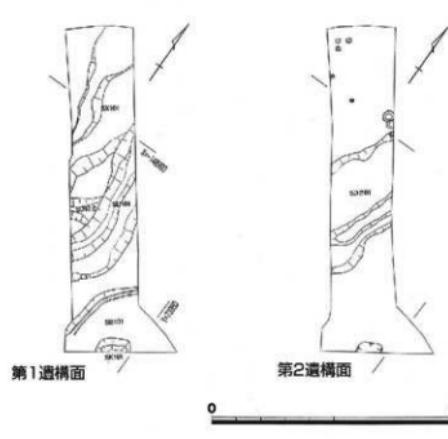


fig.185 38-2区 平面図

1 造構面ベース層)、黒灰色砂質シルト層(遺物包含層)、暗灰黄褐色砂質シルト層の順である。

**第1造構面** 暗灰黃褐色砂質シルト層上面が第1造構面で、造構面までの深さは現地表下50cmである。調査区東端で、最大長145cm、最大幅100cm、深さ18cmの土坑を検出した。土坑内からは少量であるが、弥生土器片が出土している。他の造構は、径25cm程のピットが検出された。

**第2造構面** 暗灰黃褐色砂質シルト層上面が第2造構面で、造構面までの深さは現地表下65cmである。径20~30cm、深さ5~20cmのピットが多数検出された。これらのピットは、散在して建物としてまとまるものではない。

**2.まとめ** この調査地は前年度調査の南側にあたるが、調査地全体の搅乱が著しく、調査範囲が限定されていた。遺物包含層及び造構埋土からの遺物出土量が乏しく造構の時期決定の判断に欠けるが、前年度調査同様に弥生時代第Ⅲ様式~第Ⅳ様式の造構面と考えられる。

### 第38-4次調査

**1. 調査の概要** 層序は、現代盛上・擾乱の下に、耕土、旧耕土層、暗褐灰色砂質シルト層(遺物包含層)、明褐灰色砂質シルト層(第1造構面ベース層)、暗黄灰色砂質シルト層(第2造構面ベース層)の順である。

**第1造構面** 明褐灰色砂質シルト層上面が第1造構面で、造構面までの深さは現地表下75cmである。土坑状の窪み(S K101)と落ち込み(S X101)を検出した。S X101の埋土からは、少量の弥生土器が含まれる。

**第2造構面** 暗黄灰色砂質シルト層上面が第2造構面で、造構面までの深さは現地表下85cmである。調査区北側で、溝(S D201)1条とピット1基を検出した。いずれの造構からも時期を特定できる遺物の出土はなかった。

**2.まとめ** この調査地は、戎町遺跡の最南端にあたり、遺物包含層の堆積と遺物出土量が少なく、造構の存在が極めて希薄である。ただ、造構面が2面確認され土層堆積も前年度に調査を実施した北側の調査地と類似しているため、今回確認された造構面はともに弥生時代中期頃と考えられる。

### 第38-5次調査

**1. 調査の概要** 層序は、現代盛上・擾乱の下に、耕土、旧耕土層、土壤化した黒褐色シルト層(遺物包含層)が僅かに堆積し、黒灰色シルト層(造構面)、黄灰色シルト層の順である。

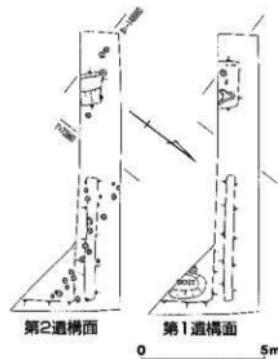


fig.186 38-3区 平面図



fig.187 38-4区 平面図・断面図

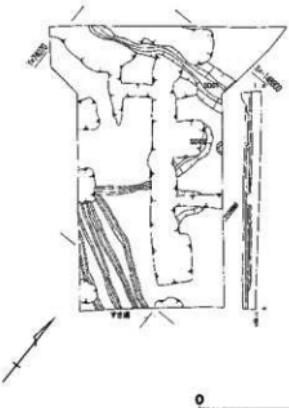


fig.188 38-5区 平面図

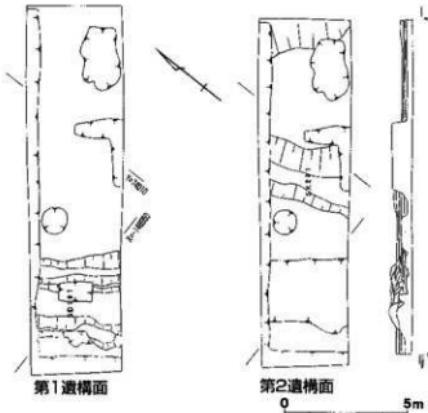


fig.189 38-6区 平面図

**遺構面** 黒灰色シルト層上面が遺構面で、遺構面までの深さは現地表下約40cmである。検出された遺構は、等間隔に並ぶすき溝4条と溝2条である。

うち東西方向の溝S D01は、幅150cm、深さ40cmで断面形はV字形で、弥生土器が少量出土した。

## 2. まとめ

この調査地は、遺物包含層と遺構面が後世に削平を受け、いつの時期の遺構面であるか判断できなかった。周辺の調査において、今回検出されたすき溝と同一方向・規模の溝が確認されているため、ある時期この周辺には畠が広がっていたと予想される。また、同一面で弥生土器を含む溝を検出したが、本来、2面以上の遺構面が存在していた可能性を考えられる。

## 第38-6次調査

**1. 調査の概要** 第1遺構面でピット3基、第2遺構面で土坑1基、ピット1基を検出した。出土遺物は第1遺構面で検出したピット内から弥生上器片が出土している以外は、第2遺構面形成層でも出土遺物はなかった。

**2. まとめ** 第1遺構面は南隣の第41次調査で円形堅穴住居を検出した遺構面と同一で弥生時代中期後半で、第2遺構面は弥生時代中期半ばと考えられる。

## 第38-7次調査

**1. 調査の概要** 層序は、現代盛土・搅乱の下に、旧耕土層・灰黄色砂質シルト層（第1遺構面ベース層）、黒褐色シルト層（遺物包含層）、暗茶褐色砂質シルト（第2遺構面ベース層）である。

**第1遺構面** 灰黄色砂質シルト層上面が第1遺構面となる。遺構面までの深さは現地表下30cmである。調査区の西側で、南北方向の溝（S D101）1条を検出した。溝内からは、中世の須恵器・土師器が出土した。

**第2遺構面** 暗茶褐色砂質シルト層上面が第2遺構面で、遺構面までの深さは現地表下40cmである。東側に緩やかに落ちていく地形と調査区中央で浅い溝状の落ち込み（S X201）を検出し

た。

## 2. まとめ

この調査地において遺構面を2面確認した。前年度の調査では、弥生時代の遺構面を2面確認しているが、今回の調査で中世頃の溝を検出したことにより、本米は3面以上の遺構面が存在していたと考えられる。この調査地は、遺跡の中心部から離れていて、遺物包含層からの遺物の出土量が少なく、遺構の存在が極めて希薄であることが判った。

## 第38-8次調査

### 1. 調査の概要

38-8次調査の調査地点は、戎町遺跡の南東隅にあたる。包含層はほとんどなく、現地表下30cmで遺構面が検出された。

検出された遺構は、北半で鋤溝を11条と南半で断面形U字形の大きな溝1条を検出した。

### 2. まとめ

包含層が削平されて存在しなかったため、出土遺物が少なく時期の特定ができないが、畠地の耕作単位が明確にわかる資料が得られた。南北の溝に関しては、当調査地の西側38-11次調査区において方形周溝墓が検出されていることから、周溝の可能性もある。

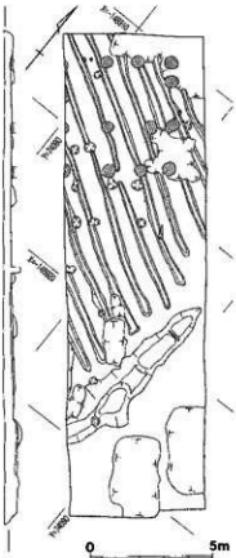


fig.190 38-8区 平面図

## 第38-9次調査

### 1. 調査の概要

削平を受けており現地表下約60cmで黄白色粘土の地山層が遺構面となる。

時期不明の溝1条と窓みが1箇所検出された。

### 2. まとめ

今回の調査地については、地層の残存状態も悪く、遺構も1基しか確認されなかった。このことは、削平によって遺構が消滅した場合と、もともと遺構が希薄であった場合の2つの可能性が考えられ今後の検討課題といえる。

調査地に隣接する地区でも遺構の時期を示す資料が少ないが、今回検出された遺構面も概ね弥生時代か古墳時代のものと考えられる。

## 第38-10次調査

### 1. 調査の概要

調査の結果、中世の遺構面1面と弥生時代の遺構面2面の計3面が検出された。

**第1遺構面** 洪水砂に覆われる中世の遺構面である。溝1条、土坑1基、牛の蹄あと等を検出した。

**第2遺構面** 中世の遺構面の直下において検出された弥生時代の遺構面である。溝4条と上坑1基等が検出された。うちSD02は、5~7mの単位で直角に曲がっており方形周溝墓の可能性がある。この場合SK01が埋葬施設になるかもしれない。

**第3遺構面** 弥生時代の遺構面で上坑をはじめ柱穴多数が検出された。他に弧状の細い溝なども検出しているので平地式住居のようなものが複数切り合って存在した可能性が考えられる。

### 2. まとめ

周辺の調査においても堅穴住居をはじめ多数の遺構・遺物が確認されている。今回の調査においても多数の遺物が確認され、第3遺構面ではこの周辺が弥生時代の「戎町遺跡」ムラの居住域のなかでも遺構密度の濃密な部分であることを確認することができた。

また、第2遺構面では、方形周溝墓の可能性がある遺構が確認され一帯が時代を違え墓

域として利用されるようになった可能性がある。

## 第38-11次調査

### 1. 調査の概要 検出された遺構は、周溝墓1基、溝状遺構、掘立柱建物、土坑、柱穴等である。

方形周溝墓は、主体部と北および東側の周溝が検出された。周溝は、全周せずに陸橋部を残すタイプと考えられる。棺の痕跡は確認されなかった。東周溝において溝底から浮いた状態で弥生中期の土器がまとまって出土した。

### 2. まとめ 周溝墓および周溝と考えられる遺構が検出されたことで、今回の調査区周辺に弥生時代中期中葉の墓域が広がる可能性が高まった。より高位に当たる北側部分は、遺構の検出が希薄となるが、遺構検出面が後世の削平の影響を強く受けた結果であって、本来は北側部分においても遺構は存在したと考えられる。

## 第38-12次調査

### 1. 調査の概要 遺構面は、表土下約40cmで検出された。調査区のほぼ全域で、遺構面直上まで耕作土が堆積しており、遺物包含層は存在せず、遺構面にも大きな影響を与える。耕土層より弥生時代中期から中世に至る遺物が出土し、異なる時期の遺構面の存在が想定されたが、検出された遺構面は1面である。検出された遺構は、溝状の耕作痕10条、土坑、周溝墓に伴うと考えられる溝2条、柱穴等である。

### 2. まとめ 溝状の遺構2条は共に、掘削方向は磁北に平行し、溝底から弥生時代中期中葉の遺物が出土している。調査区の制約により全体の形状は不明であるが、遺物の出土状況や遺構の方形周溝墓の周溝である可能性が高い。

耕作痕の時期については、弥生時代中期の遺構である可能性がある。当地区で広範な分布を示す遺構であり、調査区間の遺構の併行関係や土地利用を考える上で重要であり、今後の調査による時期の特定を期待したい。



fig.191 38-11区 方形周溝墓

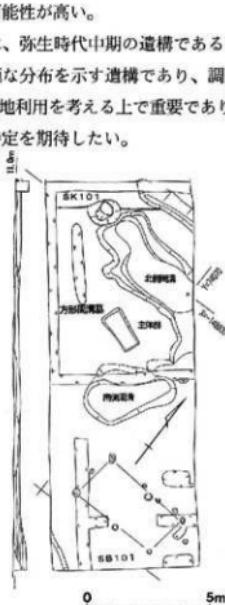


fig.192 38-11区 平面図・断面図

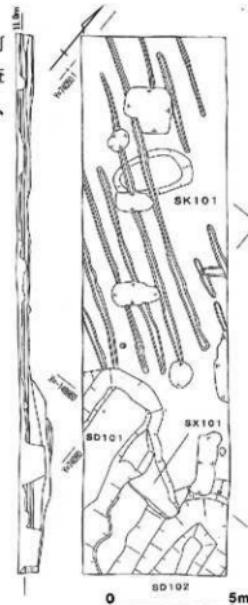


fig.193 38-12区 平面図・断面図

## 24. 戎町遺跡 第39次調査

### 1. はじめに

戎町遺跡は、現在の市営地下鉄・山陽電鉄板宿駅周辺に広がっている遺跡である。地形的には妙法寺川左岸の微高地・後背湿地に立地している。

これまでに縄文時代から鎌倉時代までの遺物・遺構が確認される複合遺跡であることが判明している。特に弥生時代はこれまでの調査成果から、他の集落との交流の中心である拠点集落と考えられている。



fig.194  
調査地位図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査対象地は平成2年度の第7次調査地点に北接した敷地である。重機により盛土・耕作土・床土を除去すると、遺物包含層および第1面である暗灰色シルトが確認された。そしてさらに1層下ると弥生時代中期遺物包含層・第2面である黒灰色細砂混じりシルトが検出され、またそれを掘り下げるに従って弥生時代前期～中期遺物包含層・第3面である暗茶灰色細砂混じりシルト質極細砂が検出される。さらに第3面の土層下には、淡灰色細砂のベース層が検出されるが、この調査区では明確な遺構は検出されていない。

**第1造構面** T.P.13.2m前後に形成された造構面である。この面では耕作痕と考えられる溝や、偶蹄目の足跡などが多く検出されたが、ピットなどの遺構は検出されなかった。周辺の状況か

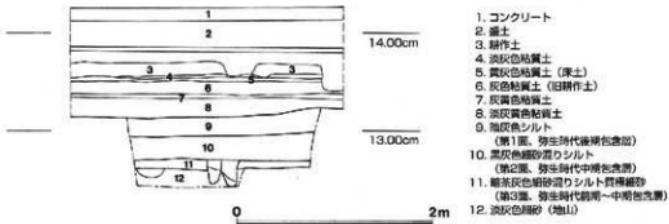


fig.195  
調査区断面図

ら平安時代～鎌倉時代のものと考えられる。

**第2遺構面** T.P.13.0m前後に形成された遺構面である。ピットが10基検出されているが、直径30～40cm、深さはおおよそ20cm程度のものが多く、柱痕跡が認められるものはなかった。また、中央には直径70cm、深さ30cmの円形土坑を検出した。いずれの遺構からも弥生土器片が出土していることや、上層の包含層から須恵器等が出土していないことを考えると、この遺構面は弥生時代後期頃のものと考えられる。

**第3遺構面** T.P.12.7mに形成された遺構面である。直径20～60cmのピットを30基あまり検出し、そのうち壺形直径50cm前後、柱痕跡直径15cm、深さ50cm程度の柱穴で構成された2×2間以上の掘立柱建物を1棟検出した。建物の方位はほぼ磁北方向である。この遺構面の時期は、上層包含層から弥生時代中期の遺物が出土していることから、弥生時代中期頃のものと考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を検出した。特に第3面では掘立柱建物を検出しており、中心が弥生時代中期にあったものと考えられる。周辺のデータでも同じような成果が得られており、今回もそれらの成果を補強する結果となった。

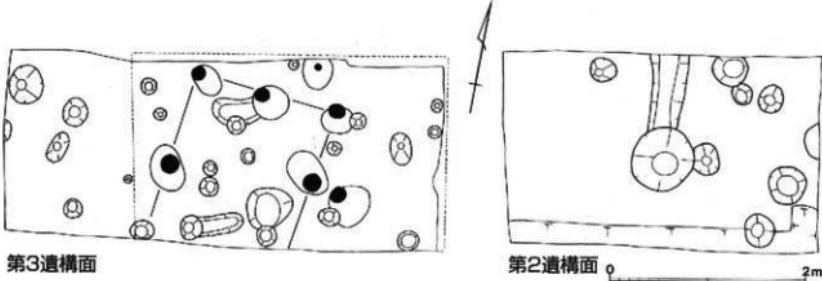


fig.196  
第2・3遺構面平面図



fig.197  
第3遺構面全景

## 25. 舞子古墳群 舞子台支群 3号墳 第19次調査

### 1. はじめに

舞子古墳群は、神戸市の西端、旧播磨国明石郡にある垂水区舞子陵・舞子坂の丘陵上に位置する。舞子浜から約1km内陸に入った地点にあり、東を福田川、西を山田川によって画される舞子丘陵は、南方間近に瀬戸内海そして淡路島を望む景勝の地である。この古墳群は、これまでに44基の古墳の存在が確認されており、古く「石谷の石窟」・「石ヶ谷群集墳」などと呼称されていたが、現在「舞子古墳群」を正式な遺跡名としている。ここには古墳群のほか、弥生時代の集落跡である舞子東石ヶ谷遺跡も存在する。

舞子古墳群は現状で24基の古墳が残るが、宅地化が進む丘陵西半に比べ、墓地公園となっている東半は群としても比較的よく古墳が残されている。瀬戸内海を見晴らす標高約80mの地点に立地する舞子台支群は横穴式石室をもつ古墳7基が残されている。

今回発掘調査を行った舞子台3号墳は、丘陵頂部平坦面の縁辺に築かれていることもあり、以前から埴丘の流失、谷側にあたる左側壁石室材の崩落が著しかったが、1995年、兵庫県南部地震により比較的良好に遺存していた山側（右側壁）の石室材の上部が崩落し、その後さらに丘陵斜面土砂の流失が進んだ。このため緊急に古墳の保護策を講ずる必要性が高まり、崩落した石室材を積み直し、盛土・芝貼りによる古墳の保護を行うこととなった。この作業に先立ち、古墳および石室の現状を確認し、記録を作成するため、今回発掘調査を行った。



fig.198  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 現況

西に開口する横穴式石室を埋葬施設とするこの古墳は、山側の右側壁の石積みは比較的良好に遺存しているものの、先だっての地震により上部の石材が崩落した。それ以前から天井石とともに左側壁は全く崩落しており、石室部分、古墳の南側斜面、そして前庭部から南西に開く谷部分に転落していることが確認できる。斜面部・谷部に転がる石材にはかなりの量があるが、現況では玄室部分の天井石にふさわしいサイズの石材は確認できない。玄室天井石など大型の石材は明石城の築造に伴い持ち出された可能性が指摘されるが、現

況で矢穴等のある石材は認められず、現況で確認できなかった石室材が発掘調査部分で腐植土の中から出土したことが示すように、腐植土中に大型石材の存在する可能性がある。

墳丘は石室よりも山側では封土を残すが、谷側は全く流失している。

### 墳丘

封土は右側壁背後のみに残る。奥壁から左壁にかけては土砂が流失し、現況地面=地山となっている。現況で確認された墳丘盛土と地山の境は標高79.0mほどで、それ以上が盛土、それ以下が地山となっている。現在の墳頂の標高は79.87mである。盛土は石室の石積みに直接かぶさっており、石室構築後あるいは構築をしながら土盛りされていることが確認できた。

なお、右側壁袖部に接する部分の落ちかけた玄室石材を復旧するため、その背後を掘削したところ、須恵器大甕胴部の比較的大きな破片2点が出土した。墳丘構築のある段階で須恵器大甕を据えての祭祀を行った可能性が伺われる。

このほか、墳丘の北側に周溝の痕跡かと思われる凹みが存在している。

### 石室

左側壁の石材は玄室部分の基底石4個と2段目の石材1個を残すだけであるが、羨道部分に基底石の据え跡が残り、右片袖の横穴式石室であることが確認された。

右側壁の石積みは、地震時の崩落以外比較的の本来の形状を保っているが、それでも、石材が内側に張らむ部分があるなど、安定した状態とはいえない。

床面は全体に搅乱を受けており、特に玄室奥に比較的大きな盗掘坑が開いている。一部搅乱をまぬかれた部分をみると、床面はほぼ水平と思われ、その標高は約77.6m。床面における玄室長は約3.5m・同幅約1.65m、残存する羨道長約3.8m・同幅約1.0mをはかる。



fig.199 3号墳転石

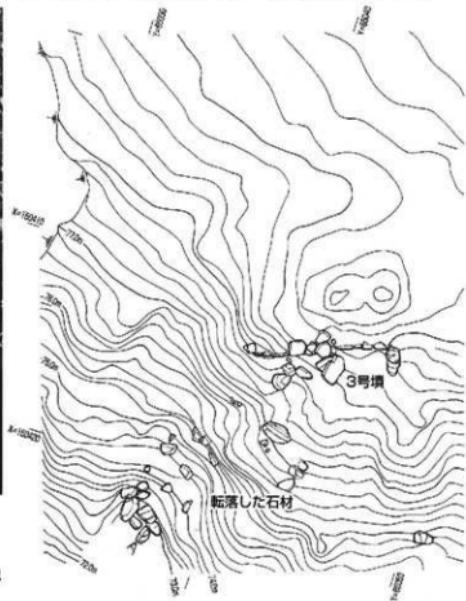


fig.200 3号墳及び周辺現況



fig.201 3号墳

右側壁で確認できる玄室部分の高さは約2.1m、羨道部分の残存高は約1.5mである。

床面を一部断ち割りして観察したところ、床面は地山上を戻した貼り床であることが確認された。すなわち石室掘形を掘削後、基底石を据え、張り床を行うという作業手順が確認できた。貼り床は固く締まっている。

石室床面上にコンクリート塊があり、堆積土の下位においてもビン・缶・包装紙などここ数十年の間の遺物が含まれている。これらの物品から、この石室は1960年代から1970年代までに搅乱を受け、その段階では床面のレベルが見えるような状態であったこと、現状の堆積土はそれ以降のものであり、その段階以降にも左側壁石材の移動があったことを確認できた。

石室内の堆積土はすべてふるいにかけた。その結果、現代の遺物に混じり古墳に伴う遺物若干が残されていた。玉類（水晶切子玉2・濃紺ガラス丸玉3・玉破片）、鉄製品（鎌・刀・馬具・釣・鉢・不明品）、土器（須恵器）などがある。

#### 前庭部

前庭部にあたる部分から南西方向は谷状に浸食されており、この凹みに舞子台3号墳のものと推測される石材が多く転落している。この部分には前庭部に供献された土器等の遺存する可能性が考えられるため、図で示す範囲について発掘調査を行った。その結果、この部分からは、調査前には確認できなかった石室材のほか、須恵器蓋杯等が出土している。調査地の下手にも転落した遺物が存在するものと推測される。

#### S K01

石室構築以前の火にかかる遺構。玄室から裏壁に向かってその右寄り裏手に存在する。地山を斜めに掘り込む遺構で、地山の流失が著しく、上部が遺存しないが、その壁面がオーバーハングしながら立ち上ることから、トンネル状の遺構になると思われる。この壁面は熱による赤変が著しい。また埋土には炭および焼土が目立ち、その形状とあわせ、この遺構は焼成にかかるものであると推測される。ただし、遺物の出土はない。石室材が焼けていないこと、石室の裏込め土に焼土・炭が含まれていることからこの遺構は石室構築以前のものであることを確認できるが、それ以上の情報は得られなかった。

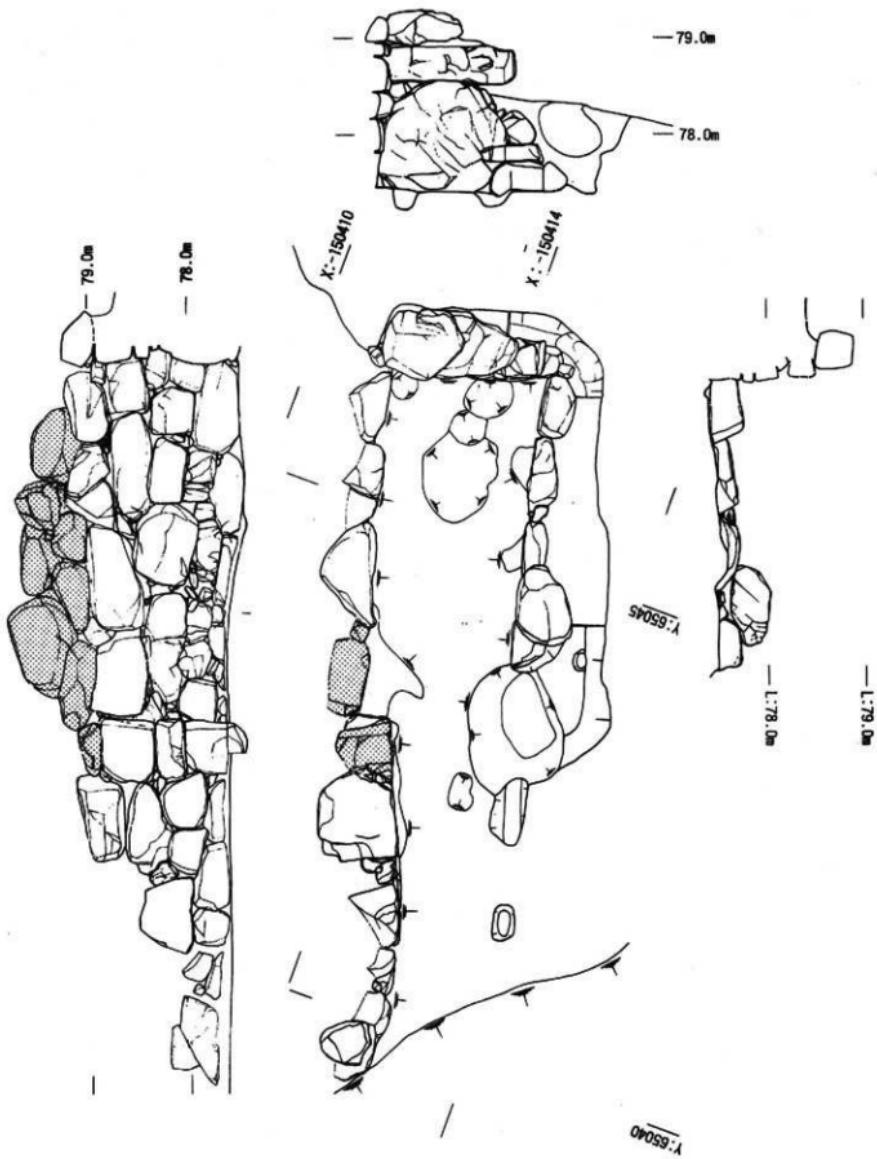


fig.202 3号墳石室平面図・断面図

(アミかけ部分は復旧した石材)

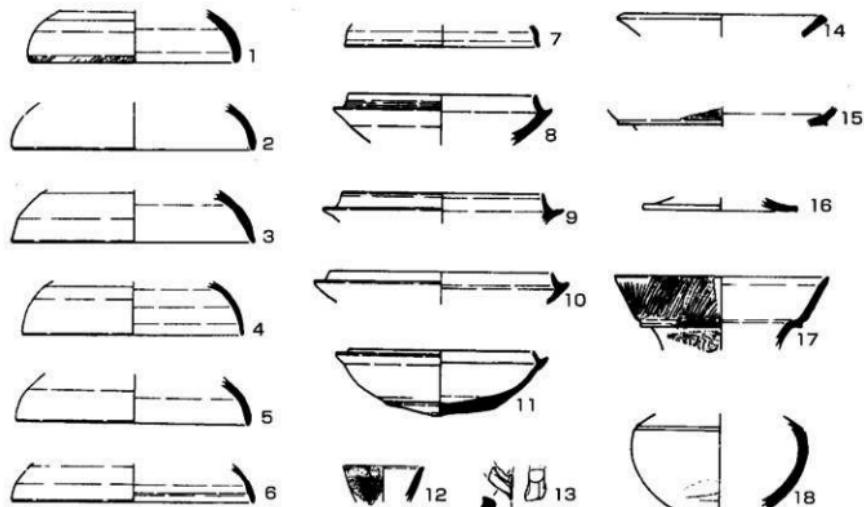


(上) fig.203 3号墳全景

(左) fig.204 3号墳奥壁

(右中) fig.205 3号墳幅部

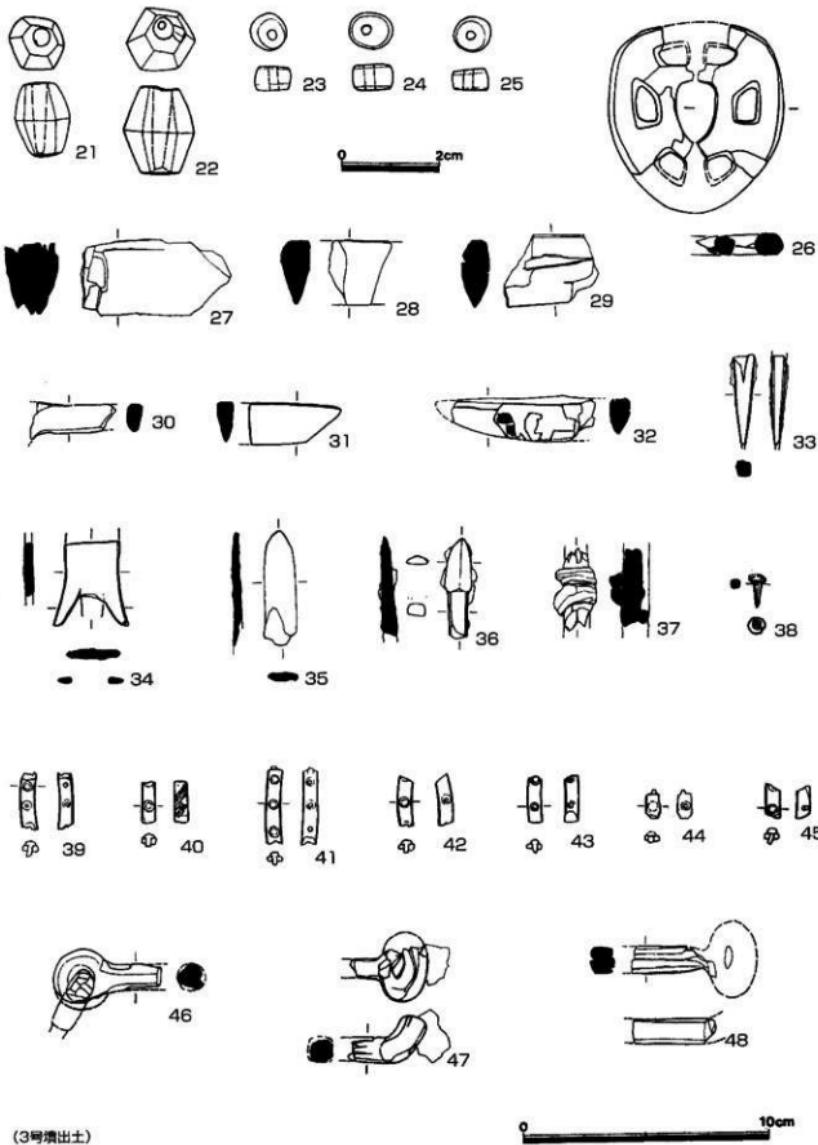
(右下) fig.206 SK01



(3号墳出土)

0 10cm

fig.207 出土遺物実測図 (1)



(3号墳出土)

fig.208 出土遺物実測図 (2)

### 試掘調査

さらに古墳背後の平坦地について開発の計画があり、古墳や集落が存在するかトレンチによる試掘調査を行ったが遺構は確認されなかった。

### 3. まとめ

舞子古墳群舞子台支群では7基の横穴式古墳が確認されているが副葬品等の遺物についての情報はほとんどない。今回の発掘調査では武器・装身具などのほか古墳の年代を明確に示す須恵器などが出土し、残存する石室の全容の確認とともに貴重なデータを得られた。

西斜面に面する1・2号墳は西、南斜面に面する4～6号墳は南西に開口する。両斜面の稜線上にある3・7号墳が西に開口すること、南斜面にわざわざ斜交するかたちで4～6号墳が築造されることから、全体として西すなわち山田川流域への志向が明らかである。西への志向を考えれば占地的に西斜面に面するものが古く、南斜面に面するものが新しい傾向にあると推測される。神戸大学考古学研究会による石室形態からの築造年代の推定(『神戸市垂水区舞子古墳群の分布および測量調査報告』1988)ともおおむね合致する。

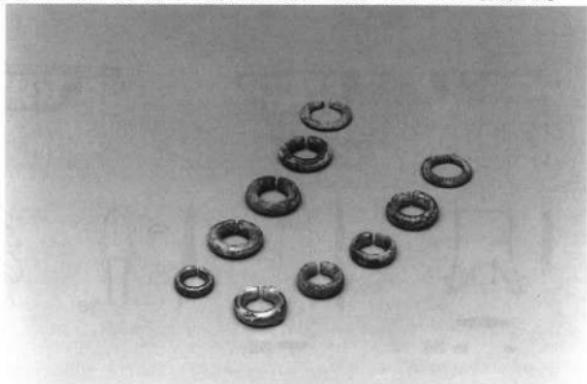


fig.209 出土遺物（1）



fig.210 出土遺物（2）

## 26. 福住遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

福住遺跡は西区押部谷町福住に所在し、明石川上流域の北岸の標高約90mのところに立地している。

これまでに昭和59年度に圃場整備事業に伴って排水路部分について調査を実施しているが、他に調査事例がなく、遺跡の詳細な内容等については不明であった。昭和59年度の調査結果からは、鎌倉時代前半の遺構・遺物が確認されていることから、遺跡自体も当該時期に中心をもつ時期の集落跡と考えられてきた。



### 2. 調査の概要

調査の結果、古墳時代の竪穴住居址1棟をはじめ、柱穴約30基、土坑状の落ち込み5基等を検出した。なお調査は、工事影響深度までに止めたため、一部の遺構については平面プランの検出までに止め掘削は行っていない。

#### S B01

調査区の中央～北部で検出した一辺約5.2mの方形の竪穴住居である。北東部が調査区外に延びているほか、南西部も擾乱等により遺存していない。深さは確認できた範囲の中では約30cmを測る。北壁中央付近に突出部があり、カマドの存在が予想される。

主柱穴と考えられる柱穴は北西部で1基検出したのみであり、全体で何本の主柱穴をもつのかについては不明である。中央やや南寄りで、2m×1.6mの平面円形の土坑状の落ち込みを検出している。

住居内の全体について掘削を実施してはいないが、埋土中からは比較的多量の遺物が出土している。特徴的な遺物として、薦羽口や鉄滓などの製鉄に関連する遺物が一定量出土している。遺構の壁面が焼けているような状況が掘削した範囲のなかでは認められないため、この遺構が住居ではなく、工房である可能性は現段階では低いといえる。

出土した土器から判断して、5世紀末頃の竪穴住居址と考えれる。

#### 柱穴

柱穴は約30基検出した。径15cm前後のものも若干存在するが、径40cm以上のものが主体を占める。

この規模の大きな柱穴については、深さも30cm程度あり、掘立柱建物を構成するものと考えられる。

このうち、S P10・11・16・18・20が1棟の建物を構成するものと考えられるほか、S P13・15・19・21についても1棟の建物を構成する可能性が考えられる。整理作業の進展を待って更に検討を加える必要がある。

**落ち込み** 土坑状の落ち込み（S X01～05）は、いずれも調査区の南部で検出している。いずれも調査区外に伸びたり、搅乱を受けるなど全体の形状については不明である。S X01・03からは上層器片が、S X04からは須恵器片・土師器片が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居址や柱穴等の遺構を検出した。先述のように昭和59年度の調査では鎌倉時代の遺構・遺物を確認していたが、今回新たに古墳時代においても、今回の調査地周辺に集落域が広がっていたことが明らかになったことは大きな成果である。特に竪穴住居址内からは鍛冶・製鉄関連の遺物も出土するなど特徴的な事象も認められる。今後周辺地での調査事例が増加すれば、当遺跡の様相についてさらに判明するものと考えられる。

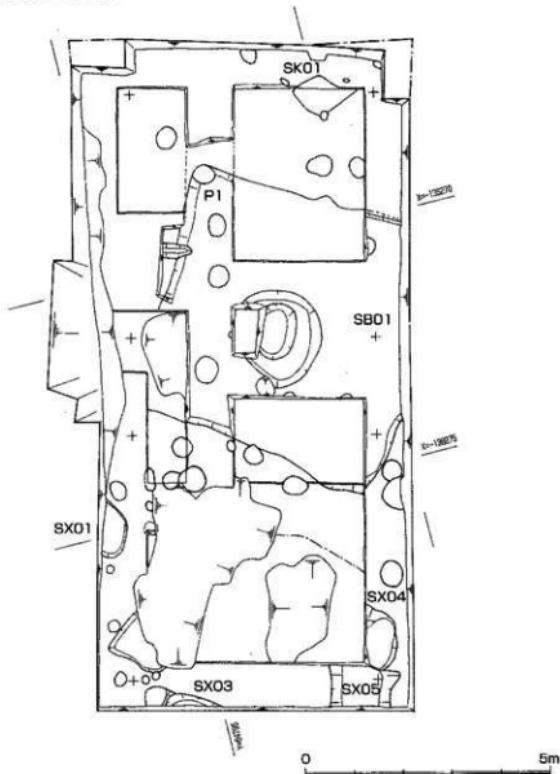


fig.212  
調査区平面図

0 5m

## 27. 端谷城跡 第3次調査

### 1. はじめに

端谷城跡は、神戸市西区・明石市を流れる明石川の一支部である櫛谷川の上流部右岸丘陵部に位置する。この山城は、鎌倉時代～戦国時代にかけてこの地域を領した衣笠氏の居城として知られ、天正6～8年の羽柴秀吉による播磨侵攻に際し、その手勢の攻撃により落城したと伝えられている。現況は山林となっており、堀切や土塁、曲輪等の施設が良好に遺された、神戸市内では数少ない山城である。

平成12年度より、寺谷地区里作り協議会を中心に、地元の御協力のもと、この山城の下草刈り、間伐等の整備活動が行われ、地域作りの核として積極的に活用しようという機運が盛り上がっている。神戸市教育委員会は、上記の活動を承けて、城の構造解明とその遺存状況を確認するために、平成13年度より発掘調査を実施している。



fig.213  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は、二ノ丸と三ノ丸を隔てる土塁と堀切にトレンチを設定した（2-1～5トレンチ）。また、二ノ丸東側に派生する尾根筋の小曲輪に、2本のトレンチを設定した（2-6・7トレンチ）、さらに昨年度未調査であった二ノ丸の先端部分に3本のトレンチを設けた（2-8～10トレンチ）。

**2-1・2トレンチ** 二ノ丸と三ノ丸（現在の満福寺境内）を隔てる土塁上に、柵列等の施設が存在したかを2本のトレンチで確認した。調査の結果、いずれの調査区も表土層下は砂礫混りの黄褐色土となり、遺構は確認できなかった。しかし、この部分については満福寺本堂の裏手にあたり、その平坦面を造るために土塁前縁部が削られており、柵列等の存在は否定できない。

**2-3・4トレンチ** 二ノ丸と三ノ丸を隔てる堀切の形状を調べるために、堀切に直交した幅3mのトレンチを2本条開設した。調査の結果、底の部分に0.3m程、崩落土が堆積している程度で、当初の形状を良く留めた良好な遺存状況であることが判った。断面の形状は、底面が4～5

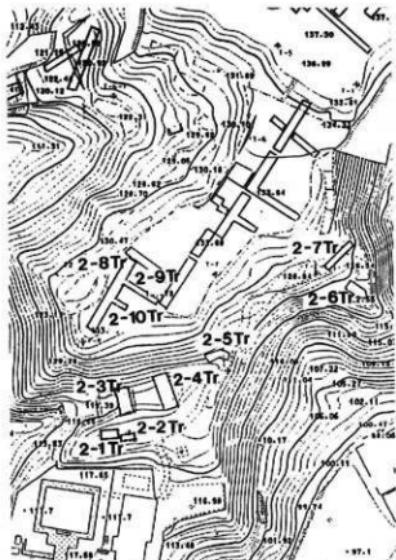
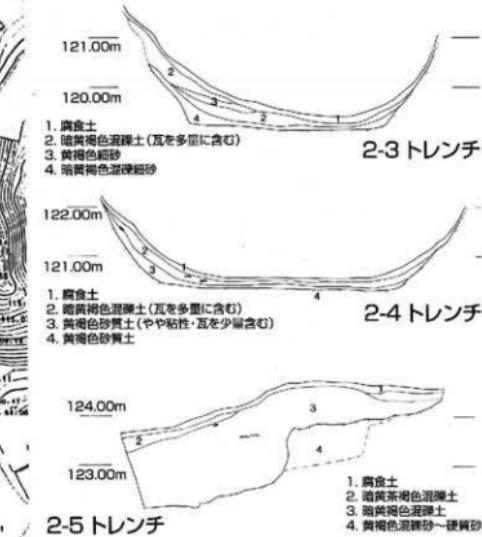


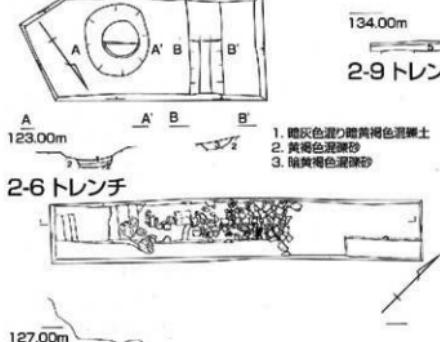
fig.214 トレンチ設定図



2-6 トレンチ



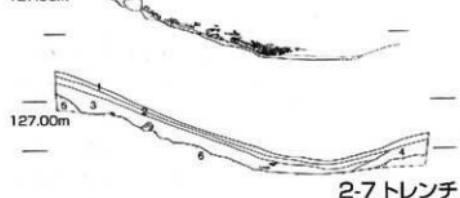
2-5 トレンチ



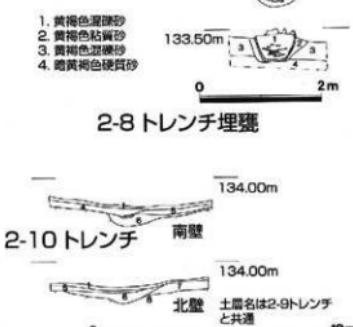
2-9 トレンチ

1. 黑食土
2. 黄褐色混鐵砂
3. 深褐色混鐵砂質土
4. 深黃褐色混鐵粘性砂質土
5. 黄褐色混鐵細砂
6. 深灰褐色砂質土
7. 黄褐色細砂
8. 黄褐色～黄褐色混鐵細砂・極細砂

2-8 トレンチ埋甕



2-7 トレンチ



1. 黑食土
2. 黄褐茶褐色混鐵土
3. 茶褐色混鐵土
4. 黄褐色混鐵砂（土壁盛土）
5. 深黃褐色混鐵土
6. 深黃褐色混鐵砂～黄褐色混鐵砂

fig.215 調査区平面図・断面図



fig.216  
2-3・4トレンチ  
全景

mの逆台形の箱堀である。二ノ丸側の斜面は、50～55度前後の急勾配の切岸となっており、寄せ手の侵入を不可能にしている。堀切底の崩落土中からは、陶器や瓦が出土した。

**2-5トレンチ** 土壁から二ノ丸に登る道は現況では、土橋状の堤を伝わり、二ノ丸斜面の犬走り様になつた道を上っていくが、土橋状の部分が当初から設けられていたものかを確認するため、切岸に平行するトレンチを設定した。

調査の結果、土堤の盛土の中には、近世以前の瓦が大量に含まれ、廃城後に土堤状の造作がなされたものと判明した。また、地山を削りこんだ切岸の一部が確認され、この部分は急角度の崖となることが明らかとなった。ただし、トレンチ内で確認した底面は堀切側が深く、後後に土堤が造られた部分は急激に浅くなっているため、切岸の一部については地山を削り残し、その部分に木橋、梯子等を掛け昇降していた可能性がある。

**2-6トレンチ** 二ノ丸東側に派生する幅の狭い尾根筋は急傾斜であるが、この部分には二つ折れになった斜路と、小規模な曲輪が設けられている。この曲輪の中央に設定したトレンチでは、直径約1.3～1.5m、深さ約0.2mの楕円形を呈する土坑が検出された。土坑内は僅かであるが焼けており、少量の炭や陶器、瓦片が出土した。時期は判らないが土坑内で焚き火をした可能性がある。また、尾根側の崖面に沿って、幅約0.7m、深さ約0.15mの溝を検出した。

これは、斜面を伝って曲輪に流れ込む雨水を排水するための溝である可能性が高い。

**2-7トレンチ** 二つ折れになった斜路の部分の一部に1本のトレンチを設定した。調査の結果、斜路の上半分では、地山を削りだした階段の痕跡が発見された。また、下半分では石材や大量の瓦が斜面上方から投げ捨てられた状態で出土した。瓦は丸・平瓦が主体である。推測であるが、城割りの際に、二ノ丸または本丸にあった建物を破却して、その瓦を斜面に投棄した可能性が高い。また、二つ折れになった斜路の変換点部分には、踊り場状の狭い平坦面が造られていることが判った。

**2-8トレンチ** 幅2m、長さ17mのトレンチを二ノ丸の先端部分に設定した。調査の結果、中央部で、地山上に僅かに盛土した幅3m程の平坦面に、壺が半ばまで埋められた状態で出土した。上半分は壊れて中に落ち込んでいた。現地調査時には、壺内からは何も出土しなかった。内部に溜まった土は、水洗選別する予定である。

**2-9・10トレンチ** 2-8トレンチに直交するトレンチを2本設けた。2-9トレンチでは、幅約1~2m、高さ0.1~0.2m程度の土堤状の遺構と、礫が帶状に集中する個所が確認された。2-10トレンチでは、幅約2m、深さ約0.25mの溝状の落ち込みが検出された。昨年度の調査結果では、この付近に堀の痕跡が発見される可能性が指摘されていたが、今回の調査で確認された遺構がそれに当たるかについては、明確な答えを得ることはできなかった。

### 3.まとめ

今回の調査で判明した主なことは、以下の通りである。

- ①二ノ丸と三ノ丸を隔てる掘切は底面の幅が4~5mの箱堀であり、現状からさほど埋没していないことが確認された。
- ②土塁から二ノ丸に登る土橋状の堤は廃城後に造作されたものであり、本来は切岸状に削られていた。通行は木橋または梯子で行われたと想定される。
- ③二ノ丸東側に派生する尾根筋の小曲輪には、土坑や溝が掘られ、その上の斜路には階段の痕跡が残っていた。また、城割り時に廃棄されたと思われる瓦類が大量に出土した。
- ④二ノ丸の先端部分では、胴部半ばまで土に埋められた壺を発見した。中には壺の上半分が落ち込んでいた。その用途は不明である。
- ⑤二ノ丸の先端部分では、土堤状の遺構や溝状の落ち込みが確認されたが、昨年度の調査で発見された堀の痕跡と繋がるかは、明らかにすることはできなかった。

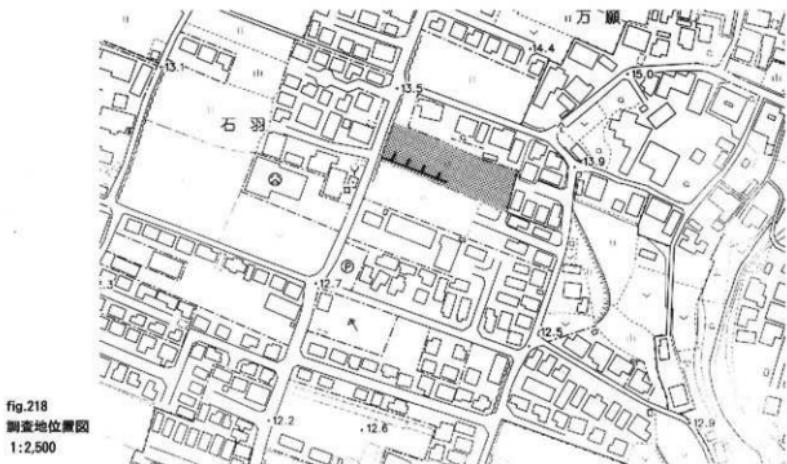


fig.217  
2-7トレンチ全景

## 28. 今津遺跡 第15次調査

1. はじめに

今津遺跡は、明石川と櫛谷川の合流地点の東側に拡がる遺跡で、弥生時代の集落遺跡として知られており、これまでに14次にわたる調査を実施してきている。



2. 調査の概要 以下に、全調査区を通じての調査の概要を示す。

基本層序

調査区の基本層序は、上層より、耕土、旧耕土、黄茶褐色粘質土（弥生後期～末の遺物包含層）となっており、黄茶褐色粘質土の下層の旧耕土上面から約40cm下で、第1遺構面の基盤層である、黄褐色シルト質細砂（西部）、灰色砂礫（東部）を検出した。さらに下層には、無遺物の極細砂層が厚く堆積し、その下層に、弥生時代中期の遺物を多量に含む黒灰色系のシルト層が厚く堆積している。

第1 遺構面

第1遺構面では、弥生時代後期～末頃の遺構を確認した。確認した遺構は、溝2条、土坑2基、不明遺構である。調査区中央やや東よりに微高地状の高まりが認められるが、遺構の大半はこの高まりより西側で検出した。遺物包含層についても、調査区西半の方は遺物を多く含むが、調査区東半はほとんど遺物を含まない。

S D01・02 S D01・02はともに東西方向に延びる溝で、弥生時代後期～末の完形に近い土器を多量に含む。S D01は幅39～57cm、深さ17cm、S D02は幅45cm、深さ9cmを測る。ともに調査区外に延びるため、全体の状況については不明である。

S K01・02 S K01はS D01・02の中間、S K02はS D02の東側で検出した。以上の4基の遺構は等間隔で並んでいる。S K01・02はともに調査区外に延びるため本来の規模や形状については不明である。深さは8cm程度のものである。ともに上坑としたが、S D01・02と同様に溝状の遺構の一部である可能性も否定できない。以上の遺構はほぼ同時期のものであろう。

S X01 唯一調査区東部で検出した遺構である。調査区北壁において断面のみ確認したため、本

米の規模や形状は不明であるが、調査区南壁では確認できなかったため、調査区よりも南側に延びる造構とは考えられない。深さも約55cmと他の造構よりも深く、S D01・02のような溝状の造構になる可能性は低い。上層から布留式併行期頃の完形の上器が数個体出土している。

#### 下層

第1造構面より約50cmの無遺物の間層を挟んで、下層に黒灰色のシルト層が堆積している。この層は恐らく湿地状に広い範囲に堆積しているものと考えられ、第14次調査でも確認している。弥生時代中期（IV様式）の土器が大量に出土しており、堆積層内にバックされた状態で含まれていたため、上器の表面も磨耗が少なく、良好な状態を保っている。

### 3.まとめ

今回は幅1mの限られた範囲の調査であったが、多くの成果をえることができた。

まず、弥生時代後期～末の完形に近い土器を多量に含む溝状の造構を確認した。このような溝の存在は平成12年度に今回の調査区の南側で実施した第14次調査でも確認されている。溝状の造構において祭祀が行われたことが想定されているが、同様な状況はさらに北側でも確認できたことになり、さらに北側へと続いていることが考えられよう。

調査区東部で確認したS X01の存在の意義も大きい。布留式併行期頃の造構・遺物は今回の調査や第14次調査では他に確認されていない。また第14次調査地においては対象地の東側部分については、遺物包含層の存在や造構の存在が希薄であり、これまで対象地の東部については造構の広がりが顕著ではないものと考えられてきた。しかしながら今回布留式併行期頃の完形の土器を含む造構が確認されたことから、今後周辺地において当該時期の集落域の存在が十分予想されることとなり、今後の調査においては細心の注意を測るべきである。

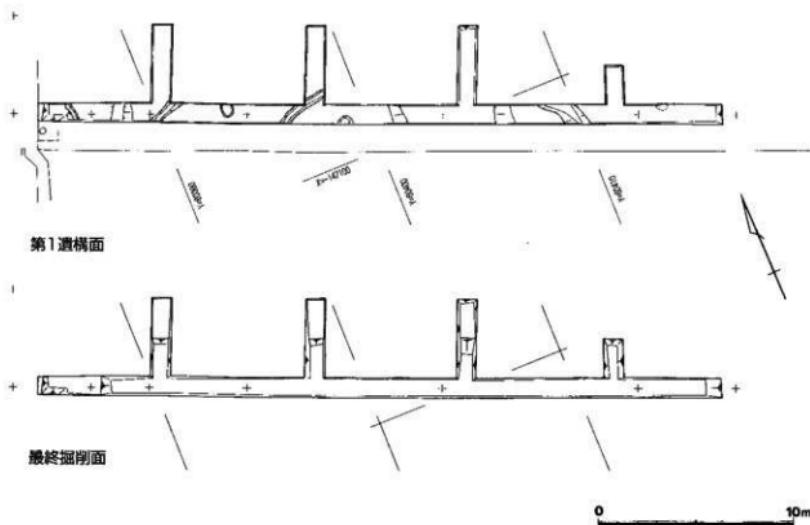


fig.219 調査区平面図

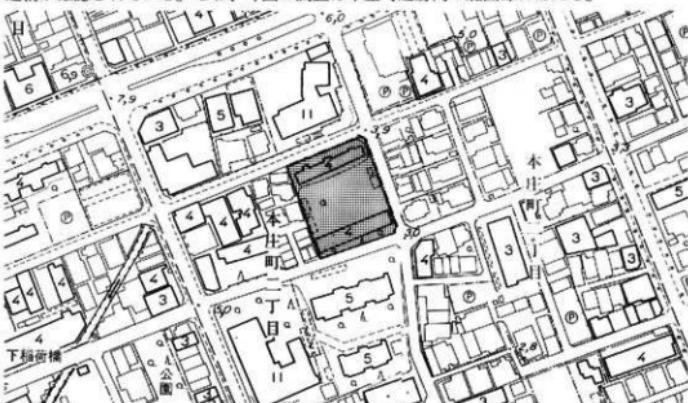
### III. 平成14年度の通常事業に伴う発掘調査

#### 1. 本庄町遺跡 第9次調査

##### 1. はじめに

本庄町遺跡は、六甲山南麓の標高3m付近の自然堤防上に位置する。付近には深江北町遺跡、北青木遺跡といった同じく砂堆に立地する遺跡があり、特に深江北町遺跡とは南辺を接している。

これまでの調査では縄文時代後期の貯蔵穴、弥生時代・古墳時代・中世の水田等の生産遺構が確認されている。なお、今回の調査は本庄町遺跡内の北西部にある。



##### 2. 調査の概要

調査区の北側は、既存建物の基礎等で遺構面が削平されており、深い遺構が部分的に残存している状況が確認された。遺構は古墳時代後期、弥生時代後期を中心に同一面で検出された。また、中世の遺構も若干存在し、縄文土器が後背湿地より出土している。

##### S B01

隅丸方形の堅穴住居である。S D03・09と切り合う。東西5.6m、南北6.2m、深さ10cmを測る。柱穴は中央と四隅の6基確認できた。柱穴の深さは20cm程度、周壁溝は北辺で検出している。弥生時代後期の遺物が少量出土している。

この住居で特筆すべきことは、住居をつくる際にできたと考えられる半円形の耕起痕跡がみられることがある。道具の幅12~14cm、間隔は15cm前後、断面は刃先と考えられる半円の直線部分の方が深い三角形を呈する。遺構面が砂であることから、掘削しながら前進したのではなく、耕起痕跡は残らないと考えられる。このため、鋤状の道具によって後退しながら掘削を行ったと考えられる。耕起痕跡の残存が良好な住居の南側部分では、住居の辺に対し平行に、東西方向で検出している。遺構面が砂であるにもかかわらず、このようにはっきりと痕跡がみられたのは、掘削した後にならさず、すぐに床を貼ったからであろうか。

##### S D02

最大幅3.2m、深さ50cm、断面は南側に緩く立ち上がるU字状の形状を呈す。溝は直径

約20mの円弧を描いているが、北側の搅乱へと続いているため、全容は判明しない。

遺物は弥生時代後期後半のものが廃棄されたと考えられる状態でまとめて出土している。壺・甕・高杯・鉢のほかに、磁石・自然木等が出土している。

溝の内側は搅乱により削平されており、区画する目的があったか否かは不明である。しかし、溝の外側には同時期と考えられる堅穴住居が検出されている。また、堅穴住居と同じく耕起痕跡がわずかに確認できる。

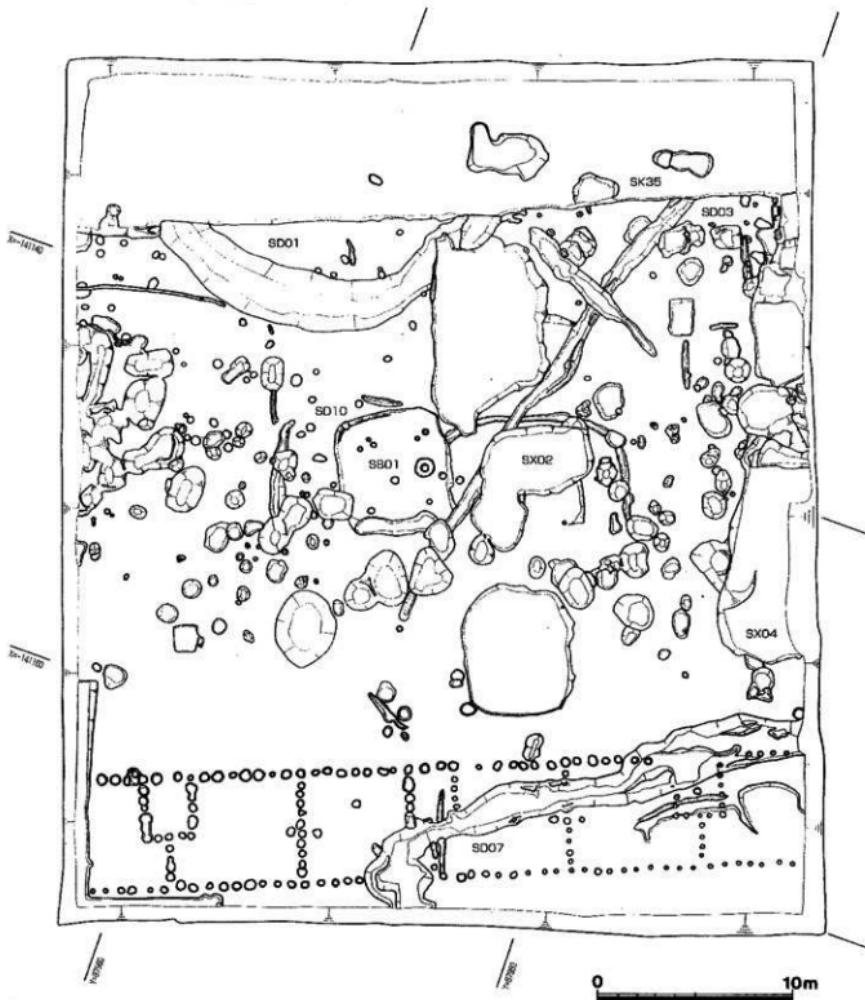


fig.221 調査区平面図

SD03

幅1.0m、深さ0.4m、断面は浅いU字形を呈す。古墳時代後期の須恵器・土師器がまとまって出土している。

中でも壺蓋3点、台付鉢1点がほぼ完形の状態で出土している。また炭化材も出土している。出土遺物のうち壺身1点は、内面に赤色顔料がみられたことから、容器の可能性も考えられる。壺蓋2点の天井部には「-」状に赤色顔料の塗布がみられる。滑石製品・チップは出土していないものの、遺構の用途については考える必要があろう。ただし、同時期の遺構は他に今回の調査区で検出されていない。



fig.222 SD01

fig.223  
調査区全景

- S D07 調査区の南側傾斜部分に位置し、北東から南東方向に検出された。最大幅1.5m、深さ60cmを測る。溝が東西方向から南北方向に屈曲する部分で杭材・板材や、加工痕のみられない自然木がやまとまって出土している。弥生時代中期～後期の土器が出土しているが、少量である。
- S D09 幅0.3m、深さ20cmを測り、円弧を描く。断面はU字状を呈し、区画内部は擾乱により削平されている。弥生時代後期後半の遺物が出土している。
- 耕起痕跡が溝の底面の一部に一列検出した。道具の幅は7～11.5cm、間隔は15～16.5cmとそろっている。
- 土坑** 土坑は全部で49基を数える。中でも直径1.5m以上、深さ60cm程度のものは中世に属するが多く、埋土は淡灰色～灰色砂が主体的である。湧水層まで掘削している土坑も多い。
- 古墳時代の土坑は、黒灰色～暗灰色砂を埋土にもつものが主体的で、直径1.0m、深さ40cm程度が多い。弥生時代の土坑はあまり検出されなかったが、深さ20cm程度と浅いものが多い傾向にある。
- ピット** 総数は63基を数える。直径50cm、深さ20～40cm程度が主体的である。柱穴が確認されたものもあったが、掘立柱建物は確認できなかった。土器がほとんど出土していないことから時期の詳細は不明であるが、土坑の埋土等から考えて弥生時代に属するものが多いと考えられる。
- 後背湿地** 調査区の南は茶黄砂の遺構面に黒灰色砂層の堆積が見られ、植物遺体が多く含まれている層が確認された。これは北から南へと傾斜する地形が埋没していく段階で堆積した層と考えられる。黒灰色砂層中には縄文時代中期の土器が含まれているが、遺構は確認されなかった。

**3.まとめ**

今回の調査は、これまでの本庄町遺跡で見られたような縄文時代の貯蔵穴や、弥生・古墳時代の水田等の生産域はあまり検出されなかったものの、竪穴住居や遺物がまとまって出土した溝等の居住域が検出された。

このことは、今まで生産域として考えられていた本庄町遺跡の、集落域が明らかになったといえよう。

また、傾斜変換点に位置することから、浜堤から後背湿地に変化する地形の復元線が調査によって判明している。第8次調査においても後背湿地から砂堆に変化する傾斜変換点が確認されているが、その砂堆部分が今調査のどちらに位置するものかは判然としない。



fig.224 S D01出土遺物

## 2. 小路大町遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

小路大町遺跡は、昭和61年に県営住宅建設工事に伴い兵庫県教育委員会により発掘調査が行われた。遺跡は六甲山南麓の芦屋川と住吉川の中間を南流する高橋川右岸の標高2.5m前後の砂堆上に立地し、東西350m、南北200mほどの範囲をもつ遺跡である。この遺跡の周辺の砂堆上に立地する遺跡は、本山中野遺跡、北青木遺跡、深江北町遺跡、本庄町遺跡などがある。これまで3次にわたる発掘調査が行われ、古墳時代から近世までの遺構が確認されている。



fig.225  
調査位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

検出した遺構は、調査地北側で古墳時代後期の自然地形である後背湿地とそれに伴う建築材群、また、調査地南側の砂堆上で流路1条、ピット2基である。また調査地南側の東西に延びる砂堆において、その北側から後背湿地が北に向かって広がっていることを確認した。また、これらの地形が埋没した後の上層の遺構面で奈良時代の祭祀遺構1基を検出した。

**祭祀遺構・馬鍔** 馬鍔は、深さ約2mの砂層上にほぼ水平に横たわっている状態で出土した。馬鍔の台木と歯の部分は完全な形で残っている。台木の長さは110cm、歯の数は10本で、根元までの長さは最長で約20cmである。台木に歯が差し込まれ、後ろ側から楔を打ち込んで固定している。台木と歯の材質は、アカガシ亜属で右端の歯はクヌギ節である。台木に差し込んでいる柄は、歯と一緒に化して22cm残存しているが、その先が欠損しているため形状は判らなかった。材は樹芯を含むサカキを使用している。

馬鍔のさらに下より、長さ90cm、幅60cm、深さ約20cmの土坑を検出した。検出状況は、馬鍔の下にウリ科（ヒョウタン仲間）の種子が散らばった状況が確認され、またその下に

はヒョウタンを用いた容器 2 個と土師器甕が据えられていた。位置関係からするとこの遺構に馬鍔が埋納されていた可能性が考えられる。

**S X101** S X101は後背湿地と考えられ黒褐色シルト・粘土と洪水砂が互層となって堆積している。全体規模等は不明であるが、西側で検出した S X103に続くようである。湿地性の堆積土からは 6 世紀後半から 7 世紀前半を中心とした須恵器・土師器が多量に出土しており、この堆積を除去後、建築部材を組み合わせた構築物を 2 基検出した。

**建築部材 A 群** S X101の中央で検出された建築材や加工材を組み合わせている構築物である。建築材は建物の柱材を転用したものである。また、この構造物の上部から北側にかけては、材の隙間を塞ぐようにイネ科の植物が掛けられた状態で検出された。



fig.226  
馬鍔出土状況



fig.227 祭祀遺構

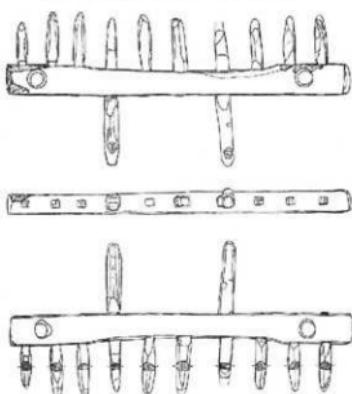


fig.228 馬鍔実測図